紅に沈んだ言葉（改）

樒　七月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅に沈んだ言葉（改）

【Ｎコード】

Ｎ１３５１Ｆ

【作者名】

樒　七月

【あらすじ】

『紅に沈んだ言葉』に要素を一つ加えた話です。登場人物が増えます。負の連鎖が、過去の事件が僕を巻き込んでいく。※この話だけでも読めるようになっています。

1　それは予言のようで

瞼に唇が掠めたのを感じて、目を開けた。
急に目に入った蛍光灯の灯りが痛かった。真っ暗な視界からいきなり入ってきた光が頭に響く。涙が出そうになった。
目が覚めると同時に脳はフルスピードで状況を把握しようとする。ここは教室で。掃除した後の床に寝た。
蛍光灯は寝る前には点いていなかった。テスト期間が終わり、今日は午後から授業がなかったため、クラスメイトは足早に教室を出ていった。その後、教室に誰もいないことを確かめてから床に寝転んだ。窓から入る光で十分明るかったから、灯りを消したのを覚えている。
僕が寝ている間に誰かが点けた。それに気付かなかったなんて。思ったより深く眠っていたみたいだ。
瞼をひと撫でして、仰向けの体勢から両手を付いて勢いよく起き上がった。
脳が揺れた気がした。
揺れを抑えるために強く目を瞑って視界を閉ざすと、視覚以外の感覚が鋭くなった。遠くで野球部の掛声が。吹奏楽部の演奏が。窓から心地良い風が。近くで花の匂いが。
花の匂い？
手を動かすと、何か触っているのに気付いた。軽い感触で、何かはわからない。
目を開けると。
まだ夢を見てるのかと疑った。
視界に入るのは赤一色で。
まるで血の中にいるような錯覚を起こした。一面の赤、紅、朱。赤に取り囲まれていて。
眩暈がしそうだった。

「花弁…」
手に取って見れば、赤いモノの正体は花弁だった。どこにでもあるような花に見えて、種類はわからない。何の花なのか、検討もつかなかった。
何故花弁が辺りを覆っているのか。眠るまでは、ただの教室の床だった。
今わかることは、瞼を掠めたのは花弁だということだけで。
「起きた？　眠り姫」
発声の練習を受けたような明瞭な声は女性のもので、背後から聞こえた。
知っている声。
すぐにその声の人物が分かり、無意識に溜息が出ていた。彼女を知らない者はこのクラスにいない。学年中で知らない人はいないかも知れない。それほどの有名人だ。
彼女がこの場にいるということは、この状況を作り出したのは。
「僕は姫じゃないよ。君の方が姫みたいな顔してるくせに」
後ろに立つ人物はくすくすと楽しそうに笑った。嫌味が通じてない。仕方なく後ろを振り返って向き合った。
教室にはもう一人いた。
『姫みたい』に整った容姿を持つ諏訪小百合は一面に広がる赤の中、机に座って縁に手を付いて、少し前屈みになっていた。その近くで、周防智哉が箒を持って床を掃いている。
一般的に美形と言われる二人の組み合わせは、最近になって見かけるようになったものだった。一年のときはそれぞれ違うクラスで、クラス替えがあったのは一ヶ月前。諏訪と周防はいつの間にか一緒にいるようになっていた。それまではどちらも一人でいるのが苦痛ではないように見えて。
自分と同じなのかもしれない、と思った。
まあ、ただ協調性がないだけかもしれないけど。
ちらりと視線を下に向けると、周防が掃いた部分には床が見えて

いた。思ったより花弁の量は少ない。
状況が判らないまま様子を見ていると、周防は顔を上げた。可愛い部類に入る容姿は無表情で、床を掃く手を休めることはなかった。
「説明がいる？　須賀由宇」
「…フルネームですか。まあ、いいけど。で、これは何？」
「秘密」
ふっと嫌味に口元を上げた周防は、興味が無くなったように視線を下へと遣った。
じゃあ言うなよ。その言葉を飲み込んだ。
今やることは全然手伝う気のない諏訪に構わず、周防に手を貸すことだった。この赤は嫌な気分になる。血を連想したこともあるけど、不吉な感じがして本能がこの状況を拒んだ。
勢いをつけて立ち上がり、教室の隅に備え付けられている掃除用具入れから箒を取り出した。床で寝ていたため、身体は固まっていて動き難い。体を解すために両肩を回した。関節が微かに鳴る。
諏訪は満足そうに脚を揺らしながら見ていた。鼻歌でも歌いそうな雰囲気だ。
本当に手伝わないつもりか。この状況に耐えられるなら、手伝う必要はないけど。明日にでもなれば、不快に思う誰かが片付けるだろう。でも、その場合疑われるのは僕だ。最後に残っていたのをクラスメイトに見られていた。その理由がなくても、僕自身が不快に思う誰かの一人なのだから、片付けないわけにはいかない。
机は掃除が終わった後のまま、ほぼ等間隔に並べてあり、掃き辛かった。何度も机と椅子の脚に箒が当たる。箒も古いため、回転する部分が動き難かった。箒が当たる度にガンガン音が鳴るのが煩わしい。
それを気にすることもなく、周防は黙々と掃いていた。元々器用なのか、机や椅子に軽く当たるだけで綺麗に掃いていっている。
暫くその様子を見ていると、ふとこの状況に疑問を持った。
何故、ここに二人がいるのか。

「もしかして、僕が起きるのを待ってた？　友情とかじゃないよね」
諏訪と周防とは友達と言えるほど付き合いはなく、ただのクラスメイトだった。クラス替えから一ヶ月経っているけど、まだこのクラスで友達といえるほどの人はいない。
友達は、今は必要なかった。
僕たちは、名字が『す』で始まるという共通点があり、協調性がないという意味でも似ている。
ただ、それだけだ。特に特徴のない顔の自分に比べ、二人の容姿は明らかに人目を惹く。だからこそ、二人とは特に関わりを持とうとは思わなかった。劣等感はないと思うけど、絶対にないとは言い切れない。比べられるのも面倒だし。
そんな葛藤を知ってか知らずか、諏訪は綺麗に笑みを作った。その意識しての笑みに惹かれるものはなかった。
作りものは、嘘くさい。それに、綺麗な顔は見慣れている。昨年は部活で毎回見ていたし。
「友情だと思っていいの？　それでいいなら、由宇って呼ばせてもらうけど。私は小百合って呼んでね。あと、起きるのを待っていたのは正解よ」
「……どうぞ」
友達になるのに断る理由はなかった。でも、少し警戒した。起きていきなり友達宣言されても。
諏訪もとい小百合は嬉しそうに表情を緩めた。綺麗を意識した笑みではない自然の表情は、素直に綺麗だと思った。前の作り物の笑顔とは違う。
小百合はいつも『諏訪小百合』を演じているような気がしていた。語尾に『だわ』や『よ』を付けるのは、皆から女性らしいものを求められていて、それを具現化しているように感じた。
今、僕の目の前で、理想の『諏訪小百合』が崩れてきている。
「僕も入れてくれる？」
「君が希望するなら。で、起きるのを待っていた理由は？」

智哉も同意を得たのが嬉しかったのか、嫌味を全く含んでいない笑みを微かに浮かべた。智哉の無表情以外の顔を見たことがなかった。さっきみたいな嫌味な感じの笑顔は何度か見たことがあるけど、この表情は初めて見た。少し幼く感じる。

クラスで人気一位二位を争う二人にこんな表情をされたら、こっちまで伝染する。自分では確認できないけど、きっと「仕方ない」とでも言うような困った笑顔をしているに違いない。

小百合は笑顔を苦笑に変え、智哉は顔を少し顰めて手を前に出した。握手ではない。照れ隠しのようなものかな。智哉が差し出した手に箒を渡し、大体掃き終わった床に残った花弁を手で摘んでいった。机と椅子の隙間に挟まったものは箒で取れなかった。

屈んで取っていると、上から小百合の声が聞こえた。

「これから起こることに関わって欲しいの」

「これから起こること…未来のことなのにわかるんだ？」

「今だから、よ。もちろん智哉も関係することよ」

未来のことが確定しているかのように話す小百合は自信満々で、間違っている可能性を考えていないようだった。それほどまでに、決まりきったことなんだ。智哉は特に意見はないようで、納得しているように頷いた。

少し疎外感がある。二人は何かを知っている。僕の知らない何かで、繋がっている。

その思考を振り切るように花弁を全てゴミ箱に入れた。ゴミ箱は紅で溢れた。これほどの花弁をどこで。簡単に想像が付き、深く考えないことにした。

教室は元に戻った。寝る前の教室の姿だ。今更だけど、教室の床で寝ていたことについて二人は何も訊かない。訊かれても困るけれど、全く関心がないことを示しているようで微妙だ。

でも、無関心なら友達にはならないかな。

「関わるってどうやって？」

「自然と巻き込まれるよ。嫌でも」

智哉は掃除用具入れの扉を静かに閉めた。
声が耳に留まった。抑揚のない声は顔に合ったもので、少し高めなところも想像を裏切らない。
普段よりも表情が柔らかい二人にどうしていいかわからなかった。向けられる表情は、ずっと前から友達だったかのような雰囲気で、違和感がなかった。
二人はいつも、その容姿で人を遠ざけないながらも一種の拒絶する空気を纏っていた。それを緩和させているところなんて見たことない。それが今、ピンと張り詰めた何かが切れたかのように空気は穏やかだった。
本当に、どこかが切れたようだった。
「面倒よね、ホント。余計なことをしてくれたわ、あのカマキリ」
「カマキリだから仕方ないよ。これを利用するのもいいしね」
こんな二人は見たことがなかった。棘のある会話を気にすることなく続けている。
『カマキリ』というのは生物の男性教師で、顔がどことなく昆虫っぽくて、カマキリに似ていることから安直に付けられたあだ名だった。生徒の大半は隠れてそう呼んでいる。でも、二人は他の生徒と同じようにその俗称を使うような人ではないと思っていた。
そう思っていたのに、目の前で二人は無邪気に、楽しそうに笑って悪口を言っている。
別にショックは受けていないけど、僕の前でこの姿を見せるのは何故なのか。
「藤田先生が関係してるわけ？」
「そう。由宇、コレ知ってる？」
小百合は宣言したとおり、僕を名前で呼んだ。先に許可を求められていたため、自然と受け入れられた。名前で呼ばれると、友達、という感じがする。
小百合が目の前に突き出した右手を見た。
人差し指と中指で挟まれたものは。

普通の眼帯だった。
実際使ったことはないけど、何度か使っている人を見たことがある。そういえば、今クラスでは志水が眼帯をしていたような気がする。眼鏡を掛けているから余計に煩わしいだろうな、と思った覚えがあった。
藤田先生は生物の教師だから眼球の授業があったはずだけど、眼球＝眼帯ということではないだろう。
眼帯。病気のイメージが強い。しかし、そのアイテムは魅力的で。
「魅力的な負のアイテム、とか」
「ビンゴ！　しかも的確。何でわかるかな」
当たっていたらしい。でも、藤田先生と眼帯の関係がわからなかった。いろいろ考えてみても、引っ掛かるものはない。…多分。
何故か感心している小百合は何度も頷き、側に置いてあった鞄を手に取った。
「まあ、本質はこれからわかるわよ。さ、帰りましょ」
小百合は後をついてくることを確信した足取りで教室を出て行った。あの自信はどこから来るのか。いや、実際後については行くんだけど。
智哉も当然のようにリュックを背負った。そういえば、智哉は小百合とは楽しそうに話していたけど、僕には意味深なことを言っただけだった。元から無口であるのは知っているけど、それでも極端だと思う。別に無理に話せとは言わないけど。
少し考えすぎていたようで、廊下から小百合の急かす声が聞こえた。僕がいなくても智哉がいるならいいじゃないか。そう思って顔を上げると、教室と廊下の境目で待つ智哉の姿が目に入った。
もしかしなくても、待ってくれているのかな。
「…智哉？」
「何」
迷いながらも呼んだ名前に、智哉は反応した。無表情であるのは変わりないけど、しっかりと目は向けられている。男子にしては大

きい目は、続く言葉を待っているようだった。でも、何かを言うために声をかけたわけじゃないから、続く言葉なんてない。
何を言えばいいんだ。
「えっと、待っててくれた？」
「もちろん。友達だって言ったばかりなんだけど」
心底不思議そうに眉を寄せて首を傾げる智哉に慌てて「ゴメン」と謝った。
疑うのは失礼だ。小百合も智哉も友達だと言ったばかりなのに。信じていないわけじゃない。釣り合わないことはわかっているけど、二人の気持ちを無視することなんてできなかった。僕だって、友達になりたくないわけじゃない。
下げた顔を上げるとき、目の端に赤が入った。
そういえば。
「この花弁…せっかくだから、花壇にでも撒いておこうか。栄養になるかな」
「そうだね。ゴミになるよりいいね」
智哉は無表情の中にふっと微かに口元を緩めた。それは無防備で、自然で。
だから、その反応は何。
「由宇は僕が冗談で友達になろうって言ったって思った？」
智哉はさらりと僕を名前で呼んだ。前から呼んでいたように、何の違和感もなく。自然で、それが当然のように。小百合と、同じように。
すぐに言葉が出なかった。
それを誤魔化すようにゴミ袋の口を結び、ゴミ箱から引っ張り出した。新しいゴミ袋をゴミ箱に付け替えながら、ちらりと智哉を見た。
「えっ…全然話さなかったから。小百合とは仲良く話していたのになーと」
「……変に鈍い」

鈍いって何が。智哉は呆れたように溜息を吐くと、小百合を追いかけるように廊下を進んで行った。それに遅れないようにゴミ袋を持って早足でついて行きながらも、先程の言葉が頭の中をぐるぐると回っていた。呆れられるようなことを言った覚えなんてない。

一人で考えるより訊いた方が早い。智哉に声をかけようと口を開いたと同時に、廊下に叫び声が響いた。

2　みんなを巻き込んで

女性の金切り声が尾を引く。
「どこから！？」
「プールの近くよ」
小百合は僕と智哉の間を通り過ぎ、玄関とは反対方向に走って行った。それに間髪入れずに続いた。
小百合がプールの近くだと言うのだからそうに違いない。あの確信を持った声は信用できた。
何が起こったのか。ホラー映画でしか聞いたことのない叫び声は、恐怖を感じているのが嫌でもわかった。前を走る小百合は迷うことなくプールに向かっていた。
体育館とプールを繋ぐ渡り廊下に続く道へと角を曲がったところで、それは視界に入った。
コンクリートの上には赤いペンキのようなもので円状の何かが描かれていて、その中心に生徒が二人いた。ガタガタと震える女生徒と、それを支えるように肩を抱いている男子生徒。よく見ると、二人はクラスメイトだった。
「真弓くん、何があったの？」
「僕もさっき着いたところです。叫び声を聞いて走ってきたら、佐藤さんがここで倒れていたんです」
クラスメイトの真弓夏目はいつもと変わりなく、丁寧に話した。冷静に見えるけど、この状況で冷静でいられるわけがない。佐藤真美の肩に添えられた手が震えているのは、佐藤の震えだけではないだろう。
人が集まり始め、辺りは騒然とした。まずここで優先するべきことは、佐藤を保健室に運ぶことだ。騒ぎが大きくならないうちに、避難しないと。
真弓に手を貸そうとした。

「真弓くん、佐藤さんを保健室へ運んであげて。根岸さんも」
小百合は野次馬が騒ぐ中、よく通る声で指示した。声を聞いて集まった人だかりの中に佐藤の友人の根岸裕子を見つけ、付き添うように言ったのも判断も的確だ。
真弓は佐藤の脇に手を回し、体を支えるようにして立ち上がった。制服にははべったりと赤い液体が付いていた。まだ液体は乾ききっていない。反対側で、根岸が背中に手を当てて宥めていた。
真弓と佐藤が離れたため、コンクリートに描かれたモノがはっきりとわかった。印象だけで言えば、禍々しいとしか言えない。明らかな悪意に吐き気がした。思わず口元を押さえた。乾いていない液体が、光っている。
赤いペンキのようなもので描かれた円状の中には星のような形があり、周りに文字らしきものが見て取れた。
「これは…」
「魔法陣」
数学の『魔方陣』でないことは、この状況を考えればわかる。しかし、小百合の口から漏れた言葉は現実からかけ離れていた。
魔法。ファンタジー。非現実的。口に当てていた手を降ろした。
これは、現実だ。
智哉は小百合に同意するように頷き、コンクリートに片膝を着いて赤い液を人差し指で掬った。
「血だ」
その言葉に周りで様子を見ていた生徒達はどよめいた。変に低い、小さな声で囁く声が耳に煩わしい。小百合はただ「そうね」とだけ返し、図形を検分し始めた。小百合と智哉は平然としているけど、僕は目を逸らしたかった。
気持ち悪いのは血ではない。この状況だ。
血だと言われてみれば、その色からして納得できた。鮮やかな赤は静脈からの出血だったか、と曖昧な知識が脳裏に浮かぶ。確かに鼻を掠める臭いは生臭かった。

生臭い？　人の血ってこんな臭いだったっけ？
「人の血じゃない…魚？」
「その辺りね。鶏かもしれない。ただ、これは人の血じゃないことは確かね」
小百合は満足したのか、人垣を割って現場から離れた。智哉も小百合の後に続き、僕は智哉に袖を引かれてついていった。持っていることを忘れていたゴミ袋が足に当たった。そういえば、この中も赤で溢れている。でも、あの赤とは違う。
集まった生徒は状況が理解できないようで、ただ立ちすくんでいた。僕が向こうの立場なら、きっとそうなっている。
女生徒の悲鳴。佐藤と真弓。奇妙な図形の『魔法陣』。何かがわかっているような小百合と智哉。何故か二人と一緒にいる僕。これをどう整理すれば、理解できるようになるのか。
智哉に袖を引かれながら、当初の目的のとおり、靴箱へと辿り着いた。何もなかったかのように先に着いて靴を履き替えた小百合は、固い表情で振り返った。
「早かったわね」
「そうだね」
智哉も靴を履き替えて爪先をトンッと蹴った。
二人だけでわかっている。何が、とはもう訊かなかった。二人は何か事前情報を持っている。それがわからない限り、二人の会話にある隠された主語は見つけられない。
何も言わずに帰る準備をして、近くにある花壇に花弁を撒いた。花壇が赤く染まっていく。今日は赤ばかりだ。
「問題が起こったのが予想より早かったってこと。…早すぎる気もするけど。それよりも由宇、私が言わなかったら、私が言ったことを言うつもりだったでしょ」
本当に何故わかるのか。確かに、誰も言わないなら指示しようと思っていたことは、小百合が言ったことと同じだった。野次馬が集まって来てからでは遅い。でも、僕が言って従ってくれるかが問題

だった。だから、小百合が言ってくれたことにほっとしていた。
指示は命令に似ている。そこには従おうという意思の形成が前提だった。小百合なら、皆が従おうとする。それくらいの影響力を持っている。
何でもお見通しのような小百合はにっこり笑い、その後にすぐ顔を引き締めた。
「あの魔法陣、悪意を感じたわ」
「加えて血。呪いのつもりでやったんだろうね」
あの禍々しい図形は『呪い』と言われれば、それが一番適当だった。血で描かれたそれは悪意以外の何ものでもなく、強い思いが伝わってきた。
その中心で倒れていた佐藤。何故あんなところにいたのか。制服は人ではない何かの血で塗れ、まるで佐藤自身が血を流しているように見えて。
身体は傷付いていないのかもしれないけど、震えていた佐藤は心が傷付いている。
「小百合、結構詳しいわけ？」
「まあね。ただの趣味よ。一時ブームになってたときに釣られてね。魔法陣とか陰陽師とかの本は結構見かけるし」
それだけでこんなに詳しくなれるわけない。でも、本当の理由を聞こうとは思わなかった。その類のことに詳しくなるほどの何かがあったことは容易に想像できる。
魔法。どこかで聞いた単語だと思っていたけど、思い出した。昨年の今頃、陰陽師などの『不思議な力』関連のものが流行っていた。その頃、小百合は一部の女子から陰湿ないじめのようなものを受けていた。小百合の容姿は良くも悪くも目を惹く。女子のいじめは執拗で、しかも隠蔽されることが多い。
いじめを知ったのは偶然だったけど、そのとき小百合は悠然としていた。臆することなく、屈することなく、小百合は笑顔でいた。笑っていられる。それは重要なことだった。

小百合が紛い物の呪術には正論で対抗していたのを思い出して、納得した。
今回の出来事は、小百合が一番理解できる。
「あっ真弓くんだ」
靴を履き替えて帰ろうとしたところに、真弓が保健室から出てきたのを小百合は見つけた。真弓は体操着のジャージに着替えていた。
保健室は靴箱の隣にあり、その隣に職員室がある。職員にとっては親切な配置で、保健室にとっては玄関に近いのは緊急事態に対応できる絶妙な位置だった。
真弓は小百合の声に気付き、疲れた笑みを見せた。しっかりとした足取りで歩いてくるけど、それは気を張り詰めていないとすぐに崩れそうだった。
そう、見えた。
「お疲れ様、真弓。大丈夫？」
「…須賀くん。僕は大丈夫です。ただ、佐藤さんが怯えてしまって」
ちらりと保健室に視線を遣った真弓は溜息を吐いた。自分の無力を感じているように見えた。
真弓が悪いわけじゃない。それなのに、ただのクラスメイトを心配する。クラスメイトでなくても、真弓は手を差し伸べるだろう。
昨年、同じクラスだった僕を助けてくれたことがあった。有名な部活に入ったことで周りから羨ましがれ、奇異な目で見られ、恨まれた。その中で、真弓は普通のクラスメイトとして接してくれて。それが、嬉しかった。
八方美人と言われることもある性格は、公平な優しさで。誰にでも敬語で話すのは個性で。
想像を悉く壊してくれる二人とは正反対だ。
「真弓くん、何があったか教えてくれる？」
僕の前とは違う、いつもの大人しい感じで小百合は訊いた。真弓はその演技に気付いているのかいないのか、微塵も感じさせなかった。

「佐藤さんは誰かに呼び出されてあの場所に向かったそうです。角を曲がったところで背中を押されて倒れ込み、それがあの円の中だった、と」
「それじゃ、怯えるのも仕方ないわね…誰でもアレが何なのかはわかってしまうもの。真弓くん、アレは何だと思った？」
「呪い、だと思いました」
小百合は静かに頷いた。直接あの赤い液体に触れてしまった真弓なら、あの液の正体はわかっているはずだ。赤い色と生臭さはそのまま、邪悪さに転換する。佐藤は誰かに呪われている、という妙な確信が沸き起こった。
それじゃ、相手の思う壺だ。
「真弓、あれは呪いじゃない。呪いだと思っちゃいけない気がする。第一発見者の君が偏見を持つと、悪い方向にいくと思うんだ。第一発見者は疑われやすいから。あと、独りで責任を負おうとしないようにね」
「…そうですね。須賀くん、心配しないでください。僕は打たれ強いんですよ」
打たれ強いというのはただの我慢だ。痛いのには変わりない。真弓も佐藤同様、被害者だ。そんな真弓に忠告だけは厳しく言ったけど、最後は力を抜いた。
打たれ強い。そんな真弓も小百合のように、強さの後ろに何かを隠しているように感じた。
「僕は真弓を心配したいんだよ。君が迷惑でも」
「有難う御座います」
ふっと少し安心した笑みを浮かべた真弓にそれ以上言うことはなく、横で見ていた小百合と智哉に目を向けた。
小百合は優しい笑顔で、智哉は困った笑みを浮かべていた。
「本当に君は…」
智哉は笑みを一瞬にして消し、視線を逸らした。その智哉に何か思うところがあったのか、真弓は面白そうに口元を緩めていた。真

弓の気が紛れて表情に余裕ができたのは良いけど、何故そうなったのかわからない。智哉の何が真弓に影響を与えたのか。
今はわからないことだらけだ。
「一つだけ教えてくれないかな」
「何ですか？」
「すぐにあの場所がわかった？　小百合はすぐにわかったみたいだけど」
素朴な疑問に、真弓と小百合は苦笑で答えた。変な質問だったか、と考えてみても可笑しなところはないと思う。場所を特定できるほど、あの叫び声に何か含まれていたのかな。
「わかりますよ。あの場所からの声は」
「体育館とプールの間だから、変な響き方がするのよ。人気がないしね。まあ、たまに放送部とか合唱部が発声練習に使っていたりするから、その響きを聞いたことがあればわかるはずよ」
あっさりと謎解きは終わった。「まあ、由宇ならわからないかもねー」と小百合が付け加えたのに対し、真弓は笑顔で頷いた。僕ならわからない、というのが引っ掛かった。智哉も困ったような表情で口元を緩めていた。あの場所は何度も言ったことがある。遠くから聞かないとわからないということかな。
今度放送部の発声練習を聞いてみよう。
「須賀くん、諏訪さんと周防くんと仲良くなったんですか？」
「さっき友達になった。真弓も友達になる？　小百合と智哉の方が良いかな」
名前で呼び合っているのに気付いたのか、真弓は鋭く指摘した。それは小百合の誘いの言葉に似ていて、カマをかけてみた。昨年は部活動や廃部後の処理で友達を作る余裕はなかったけど、今は真弓と友達になりたかった。小百合と智哉と友達になったこの状況は、昨年部活に入った時の状況に似ている。昨年できなかったことを、今なら。
僕と仲良くなりたいのではなく、小百合と智哉と交友関係を築き

たいだけなのかもしれないけど。
その問いに、真弓は楽しそうに笑った。
「友達になるのは喜んでお願いします。ただ、なぜ今、こんなときに友達になったのかと思いまして」
「今だから、よ」
小百合は強く言い切った。真弓には間違いなく意味は伝わったようだった。ということは、真弓も小百合と智哉に見えている未来像を少しは知っているということか。
今、この時。この時点だから何かを変えるのに適しているというのは、何を暗示しているのか。
結局答えは出なかった。
「数珠など持っていますか？」
真弓の問いが理解できなかった。
数珠。普通は持っていない。なぜ、今そんなことを訊くのか。
小百合は鞄から眼帯を取り出した。
「真弓くんも知っていたのね。十字架でも良いんだけど、今は眼帯とか包帯の負の印象のものが強いわ」
「やはり、あの言葉が…」
小百合と真弓が何について話しているかわからなかった。数珠と十字架と眼帯と包帯。どう関係しているのか。
智哉は二人の会話が理解できているようで、表情に迷いはなかった。
「真弓くんも巻き込まれたわね。でも、別行動でいきましょう。まだ、明日どうなるかがわからないから」
「そうですね。どう進むか、まだ読めないですね」
小百合と真弓は頷いた。真弓も顔は整っていて、密かに人気がある。小百合と並んでいて違和感はなかった。違和感があるのは、異質なのは僕だった。昨年のあの時も、今も。
真弓に「じゃあ、また明日」とだけ返して先に歩き出した智哉の後を追った。真弓には「さよなら！　また明日」と右手を振って急

いで智哉に並んだ。初めとは逆に、小百合はゆっくりと後ろを歩いた。

何かが着実に変わってきている。それは前進なのか後退なのか。その答えを知るのが今は怖かった。

今はまだ、知りたくなかった。

3　すでに始まっていた

「あれ、こっち方面だっけ？」
学校を出てから二十分は経っている。普通に話していて時間に気が回らなかったけど、駅を通り過ぎていた。確か二人は電車通学だったはず。僕の家は駅を少し越えたところで、駅からは徒歩で十分ほどだった。片道三十分の通学で自転車ではなく徒歩通学なのは、ただの健康のためで。
小百合と智哉は今更、という顔をした。
気付くの遅くて悪かったな。
「んー純粋な由宇くんを送って行こうかなーと」
「純粋って何。その言い方だと、言い換えると馬鹿ってことになるけど」
「馬鹿じゃ意味が違う。送られるのは嫌？」
窺うように首を傾げて上目遣いに見る智哉に頭痛がしそうだった。ただでさえ可愛い顔なのに、それを意識しての仕種は一層智哉の容姿を強調させた。
思わず額を押さえた。本当にこの二人は。自分がどうすれば魅力的に見えるか自覚していて性質が悪い。
助けを求めるように小百合を見ると、小百合は苦笑して智哉の額を軽く手の先で押した。その様子は友達の気軽さで。途端に智哉はふっと息を吐いていつもの無表情に戻した。
だから何があったんだ。二人は僕のわからないところで理解し合っている。そして、真弓も何かがわかっている。仲間外れになった気分だ。
いや、今は信じよう。
「送られるのは嫌じゃないけど、君たちが遠回りになるのが気が引けるだけだよ」
「これは私たちの自己満足よ。帰るときくらい、長くいたいなって。

友達になったばかりだしね」
小百合は気持ちを切り替えたようで、快活になっていた。生き生きしているのは見ている方も気分が良い。楽しそうにしているところを申し訳ないけど、足を止めた。同じように二人も止まった。
「ここが僕の家。今日は突然だから帰ってもらうけど、事前に言ってくれれば用意しておくから、上がっていって」
家はきちんと掃除してある。でも、客を迎える用意はできていなかった。家に上げるのだから、茶菓子の用意くらいはしておきたい。
二人は驚いたように顔を見合わせ、くすくすと笑い始めた。その様子は教室での悪巧みに似ていたけど、表情が違っていた。僕の前での振舞いだけは演技をしていないようで、誤解しそうになる。
僕は君たちにとって特別なのか？
「うん、じゃあまた今度上がらせてもらうよ。明日は昼食の用意をしないで来てね。また明日、由宇」
「じゃあねー」
ひらひらと手を振る二人に手を振り返した。放課後、教室で目が覚めてから二時間も経っていない。それなのに展開は速かった。
これが藤田先生の何かの影響か。問題が起こったのが早かったというのも関係しているのだろう。智哉が「巻き込まれる」といっていたのが気になった。もう巻き込まれているのか、それともこれからなのか。
玄関の扉がいつもより重く感じた。

4　呪いと言ったのは誰

次の日、佐藤は二時限目後の休憩時間に登校してきた。顔色は悪く、昨日のことを引きずっていることがわかる。クラスの大半は、すでに朝に担任から昨日の出来事を聞いたため、佐藤に不謹慎ながらも好奇心を含んだ視線を向けていた。

少しは遠慮しろよ。担任の説明は端的だったが、端折りすぎていて興味を誘うのに充分だった。「昨日、誰かが呪いの真似事をしたようです。皆さん、くれぐれも真似しないでください」なんて、噂になるに決まっている。実際、その場に駆けつけたクラスメイトが、事の詳細を得意そうに話していた。脚色され、本当のことが埋もれている。面白おかしく、物語が作られていく。

耳を塞ぎたかった。机に伏す前、視界の端で、教室を出ていく担任の首のチョーカーが目に入った。赤い紐で、真ん中に十字架をモチーフにした銀細工が付いている。赤。十字架。何かが引っ掛かった。でも、思い出せない。

嫌な感じだ。それに佐藤が加わって空気が澱んだようだった。感染するような気がする。

こういうのは昔から嫌だった。こそこそと集まって悪口を言う。自分は仲間に入っているから対象になる心配はない。みんなが言っているから自分は悪くない。そんな悪循環が生まれていく。『友達』という関係の集合体で正当化している。

だから、関わり合いたくなかったから、協調性なんて持たなかった。そんなことに巻き込まれるなら、友達なんていらない。利用されるのも嫌だ。

佐藤に不躾な質問をしている声が聞こえた。

「お前、誰かに恨まれてんのかよ？」

ハハハ、と乾いた笑いが辺りを包む。何故それを言うんだ。佐藤は肩を震わせていた。ここからは見えないけど、泣いているのかも

しれない。それを庇うように、根岸が佐藤の肩を抱いた。
「そんなはずないじゃない！　真美は恨まれるような子じゃない！」
それは違う。人は知らない内に恨みを買っていることもある。それは庇うことにはならない。そんな陳腐な言葉、意味がない。慰めにもならなかった。
教室の中は、佐藤に同情するだけでなく、佐藤に非があったのではないかと疑う者もいるようだった。ヒソヒソと交わされる会話は、佐藤にも聞こえているはずだ。聞こえるように言っている可能性もある。
何故、誰もそれが『呪い』ではないのではないかと言えないんだ。前提が、固定している。それを壊したかった。
「あれは『呪い』じゃないのかもしれない」
教室の中はしん、と静まった。それほど大きくない声は、思った以上に教室を通り抜けた。佐藤は振り返り、驚いたように表情を固めていた。
僕の言葉は意外だったらしく、少なからず衝撃を与えたようだった。視線が集中している。少し考えればわかることなのに、今気付いたかのように根岸は振舞った。友達なら、すぐに思い当たってもいいはずだ。恨まれるはずない、と言い切れるなら余計に。
反論されたのが癪に障ったのか、佐藤をからかっていた男子生徒、黒井は叫んだ。
「呪いに決まってるだろ！　魚の血で描かれているのが証拠だ！」
「あれは呪いじゃないわ」
黒井の台詞を小百合は打ち消した。立ち上がってきっぱりと言い切った小百合は控えめながらも確信させるのに充分な声音で言った。自信のある声は、それ以外の答えを否定する。
黒井は何も言わなかった。言えない雰囲気だった。
小百合は佐藤を見た。
「意図は呪いだったのかもしれない。だけど、あれじゃ意味がないわ。どちらかといえば、佐藤さんにとって良い結果になるものだっ

たと思うの」
「何で…そう言えるの？」
「完璧じゃなかったから」
にっこりと笑った小百合に、佐藤は安堵の溜息を吐いた。張り詰めていた気が緩んだような、肩に載っていた重りが下りたような表情だった。小百合の笑顔が、言葉に力を与える。
僕が言わないのはその理由が大きい。人によって言葉が与える影響が違うのなら、適任者が言えばいい。今の状況では僕の言葉には力がなかった。小百合だったからこそ、あの不吉な図形の本当の意味がわかり、普段から注目されていることもあって、その言葉は素直に聞き入れられる。
「でも、『呪い』には違いないってことよね？」
余計なことを。根岸は心配を装って佐藤に追い討ちをかけた。途端に佐藤の表情は固まり、顔色は青くなった。安堵から絶望へ。以前より顔色は悪かった。
小百合はやれやれ、と溜息を吐き、根岸に鋭い視線を遣った。
「そうなるわ。でも佐藤さん、私はあなたにとって良い結果になるものだったと言ったわよ？　どちらを信じるかはあなたの自由」
話しは終わったとばかりに、小百合は椅子に座った。また教室が静まり返った。
三時限目の開始を知らせるチャイムが大きく響いた。

「智哉の手作り？」
昨日、昼食の用意をしてくるなと言われたから、何も持ってきていなかった。昼食の時間になると、食堂に向かう生徒と同じ速さで小百合と智哉はこっちに向かってきた。智哉の手には、古風にも風呂敷に包まれた重箱が握られていた。
今は空いている前の席を反転させて、小百合は座った。智哉も重箱を机に載せ、隣にあった椅子を間に置いて座った。
「そう。今日は智哉が昼食当番よ」

「昼食当番？」
智哉は漆塗り風のプラスチックの皿を配り、それに合った箸も配った。その間に小百合は風呂敷を解き、三段の重箱を崩していっていた。
一段にはちらし寿司が入っていて、他の二つはおかずになっている。どれも店に売っているようなもので、智哉の手作りというのが信じられなかった。
いや、信じるけど。
「交互に昼食を作ってきているんだよ。どっちも手作り弁当を持ってきていたから、労力は同じだしね。得意分野の料理だから、効率は良いし、楽しいよ」
智哉が手を合わせたのを合図に「いただきます」の声が重なった。小百合は素早く自分の小皿に分けていった。智哉も丁寧に自分の分を取っていっているのを確かめてから手を伸ばした。
とりあえず、好きな玉子焼きを小皿に取った。
「美味しい…」
口に入れてすぐに出汁の風味が感じられた。噛む度に口に出汁と卵の味が広がる。これは普通に店に出せるんじゃないかな。
思わず漏れた感想に、智哉は安心したような、ふっと緩んだ笑みを見せた。
「和食はやっぱり智哉ねー。ちなみに私は洋食が得意よ。由宇も昼食会に参加する？」
小百合は満足そうにいろいろな種類を少しずつ食べていた。きちんと全て飲み込んでから話している。二人の丁寧に箸を口に運ぶ所作や、食事中のマナーの良さは、慣れたものだった。動きが自然で、最近は家族以外で目にすることがなかった。僕は別に気にしないけど、おかずを取る箸は別に用意されている。容姿に加えてのこの礼儀正しさは賞賛に値する。まあ、僕も最低限の礼儀は身につけているけど。
昼食会に参加するということは、僕も順番に昼食を作ってくれれば

いいってことかな。でも、二人の料理の腕は確かのようだし、僕が作ったもので良いのかが疑問だ。
昨年所属していた部活、『環境整備部』通称『万屋』はなんでも屋のような活動内容で、僕は料理部の助っ人をしたことがあったけど。
「僕も料理作ってくればいいわけ？　得意っていえるのは中華だけど」
『作ってくれるの？』
驚いたように、期待するように声を揃えてこっちを見た二人の表情は、小さい子供のようにわくわくしたものだった。
口から苦笑が漏れた。僕が作るというのは意外だったようだ。話の流れからそれは当然だと思っていたけど、そうじゃなかったらしい。
そんなに期待されても困るんだけど。
「僕が作るので良ければ。じゃあ、明日作ってこようか？」
『是非！』
嬉々とした声は自然と重なった。仲が良いんだな、とそんな様子を見ていつも思う。いつから二人は仲良くなったのか。このクラスになってから、大体のグループは把握している。四月の初めは二人に接点はなかったはずで。いつの間にか一緒にいるようになっていた。
その中に何故僕を誘ったのか。二人が付き合っているのをカムフラージュするためかな、と疑ってみても、そんな様子はなかった。
理由が欲しいけど、それを訊くのは憚れた。
「じゃあ、何か希望はある？」
「んー春巻きが食べたい。生でも揚げたものでもいいわ」
「御飯は炒飯がいいな」
頷いてから顔を下に向けたまま、二人の希望に必要な材料を考えた。冷蔵庫にある物、帰りに買う物。弁当ということを考えると、冷めても食べられるような物。この時期はまだ、生ものでも大丈夫

かな。煮物を口に入れて噛みながら考えを纏めた。
ふと顔を上げると、じっとこっちを見ている二対の瞳に合った。
これはちょっと。
照れるじゃないか。
「由宇に見返りなんて求めてないのにね」
「作ってくれるなら嬉しい限りだけど。明日が楽しみだよ」
自然と団欒な空気が漂っていた。昨日友達になったばかりなのに、ずっと前からの付き合いのように感じる。それが僕だけでないならいいけど。
このとき、周りから様々な感情が籠った視線が刺さるのを感じていた。それは、昨年から何度も感じたものだった。それでも、慣れることはない。慣れたくなんてなかった。
羨む者、恨む者、妬む者。それは僕に向けての視線だった。わかっている。僕はこの中では異質だ。特に目立つことのない、普通の域を抜け出さない顔。クラスでは特別に頭が良いわけでも運動ができるわけでもないと思われている平凡さ。実際、成績は上位で運動は球技以外は大抵平均以上に出来るけど、それを公表していない。昨年部活動や文化祭で一部披露したけど、それを覚えている人は少ないだろう。飽くまでクラスメイトの認識での僕は普通、平凡だ。
だから、僕が二人と並ぶことは変だった。協調性のない『す』繋がりの三人、というだけで。友達になるのが不自然だった。
でも、二人が必要とするなら別だ。二人が僕と友達になりたいなら、僕がそんな理由で拒絶するのはおかしい。協調性のない『す』だけの繋がりが、友達という関係になってもいいじゃないか。
周りの視線を無視して、僕は二人に笑顔を向けた。

5　連鎖していく悪意は

放課後はいつもと同じように訪れた。でも、どこか不自然だった。教室が、朝の空気を引き摺っている。

教室にいるのに耐え切れなくなったのか、佐藤は五時間目が始まる前に早退した。それは賢明な判断だ。こんな状況では悪化するだけだ。

また、僕に対して変な視線が付き纏っていた。不躾な、嫌味の籠った視線。

別に気にしないけど。

「由宇、特別棟に寄ってもいい？」

小百合は荷物を入れた鞄を肩に掛け、帰る用意をして机の前に立った。智哉もリュックを背負って待っていた。悪意の視線を気にすることなく、二人は僕の領域に入ってくる。それは、確かな友情だった。

「いいよ。今日は帰りに荷物を運んでもらうことになるけど」

「それは予定の内」

こんなとき、智哉の素っ気無い返事が嬉しかった。荷物持ちなんて嫌な顔をされるものの部類に入るのに。智哉と目が合ったので、笑顔で嬉しさを伝えた。

智哉はすっと視線を外し、小百合の方へと向いた。もしかしなくても、智哉は僕の笑顔が嫌いなのだろうか。普通に話しているときはしっかりと目を見るのに、笑顔や表情を緩めると変な反応をする。それは小百合も同じだった。二人は僕の笑顔が嫌いだという結論に達してしまうのは仕方がない。

また機会があったら訊いてみよう。嫌な気分にさせるのは僕だって嫌だ。

僕の準備が整い、クラスメイトの奇妙な視線を背に教室を出た。

「音楽室に教科書忘れちゃって」

小百合は音楽室のある特別棟へと繋がる渡り廊下を目指してすたすたと歩いた。背筋はきちんと伸び、自然と綺麗な歩き方をしているところが小百合らしい。智哉は小百合のような上品さではないけど、姿勢良く歩いている。後ろから見ていると、歩き方の見本のようで気持ち良かった。

自信があるように見えるのは、背筋を伸ばしている影響が大きい。それに見合うものを持っているのだから、人の目を惹いて当然だ。友達になって近くで見ると、それははっきりとわかった。

だから、一層自分とは違う、遠い所にいるように感じた。

「由宇と智哉は書道だったわよね？　由宇、書道が得意なの？」

渡り廊下を過ぎて特別棟の二階に入ったところで、小百合は顔だけ後ろを向いて話しかけてきた。二階には書道室がある。三階には美術室があり、目指す音楽室は四階だ。

「得意というより、好きなだけ。墨の匂いが好きで小学生の頃から続けてるんだけど」

「謙遜だね。由宇は達筆だよ。真弓くんと並んで、クラスでトップだから」

なんて褒め方するんだ。智哉は説明するように淡々と言ったが、それでも内容は僕を喜ばせるのに充分だった。

得意と好きは違う。しかし、それに実力が伴っていて認められることは、素直に喜べた。それが友達、智哉になら、余計に嬉しい。顔が緩んでしまいそうになった。でも、僕の笑顔が嫌いなのかもしれないという懸念があるから、笑顔は隠そう。

「ありがとう、智哉。君だって綺麗な字を書くけど」

智哉の真似をしてさらっと言ってみた。小百合はおや、という表情をして笑みに変え、智哉は意地悪そうな笑みを作った。

だからなんでそんなに素の表情を出すかな。僕は特別だって自惚れそうになるじゃないか。

「あー良いわよね、智哉は。私も書道にすれば良かった」

仲間外れの気分なのか、小百合は不満そうに顔を顰めて先に階段

を昇って行った。智哉は自然と僕の隣にいて、小百合の拗ねている様子に仕方ない、というように苦笑した。僕もそうだな、という意味を込めて眉を上げた。この距離感は悪くない。二人の間は心地良かった。

特別棟に人は少なく、部活をしている生徒以外は滅多に見かけない。特別棟を使う部活は書道部と美術部と吹奏楽部で、書道部と美術部の活動している二階と三階は静かだった。

四階に上がると吹奏楽部が練習している音が微かに聞こえた。音楽室は防音設備が整っているので、微かに漏れているのは隙間が空いているからだろう。小百合はゆっくりとドアを開けて中へ入って行った。

音楽室の隣には図書室がある。図書室の入り口には掲示板があり、そこには新刊や入荷した本の紹介が載っている。小百合を待つ間、その掲示板を見ていた。智哉も隣に立って同じようにしていた。

そのとき、近くから悲鳴が聞こえた。昨日と同じような恐怖が滲んだ女生徒の声。それは昨日の出来事を甦らせた。

声は図書室を過ぎた階段の方から聞こえた。

「智哉！」

智哉は頷き、先に走って行った。僕は小百合が来るのを待ってから後を追いかけた。小百合なら教室にいてもどこから声が聞こえたかわかるだろうけど、一緒に行ったほうが確実だ。図書室を過ぎたところで足を止めた。

階段を下りたところに、根岸と真弓、智哉がいた。根岸は身体を震わせて廊下に屈んでいて、真弓は昨日と同じように根岸の肩に手を置いていた。昨日と同じ光景。その中で違っていたのは、根岸の周りに長方形の白い紙が散らばっていることだった。

智哉は落ちている紙を一枚取った。紙には何か書かれている。

「やっぱりね」

小百合は状況を理解したようで、階段を下りて行った。ここにいても仕方ない。小百合に続いて階段を下りた。

「札だね」
「魔法陣の次は札。素人が手を出していい領域じゃないのに」
小百合は智哉から紙を受け取り、ちらりと見てから僕に差し出した。手に取ってみると、紙に書かれていたのは不思議な文字だった。神社で貰うお札に似ている。
「真弓くん、また第一発見者になったの？」
「真弓ならここにいても不自然じゃない。図書室の常連だから」
そうね、と小百合は深く追求することはなく、周りに落ちている紙を拾っていった。智哉も同じように拾っていく。今回収しておけば、佐藤のように噂は広まらないだろう。
真弓は僕を見て弱く笑い、すぐに視線を根岸に移した。横目で小百合と智哉を見ると、二人は根岸に関心はないようだった。
片膝を着いて、根岸の顔を覗きこんで見た。
「根岸、大丈夫？」
「……私は悪くない…」
一応声を掛けてみたけど、応えはなかった。その代わりに、何度も「悪くない」と繰り返す声は狂気じみていた。ぶつぶつと、洗脳するように、暗示をかけるように声は途切れることがなかった。
昨日の魔法陣は根岸がやったことだということはわかっていた。それは教室での会話で確信していた。
じゃあ、今度は誰がやった？
小百合と智哉は紙について何かを話し合っていて、その内容は聞き取れなかった。聞いたところでわかるとは思えない。札に対する知識なんてなかった。
感じるのは『呪い』という悪意だけで。
視線に気付いたのか、智哉は右手に持った紙を左手の人差し指で指した。
「また間違ってる」
「何かの本を写したみたいだけど、これは『呪い』の意味でさえない。間違っているけど、祈祷の一種よ」

たとえそれが間違って祈祷の意味を持つものでも、相手の趣旨は『呪い』だろう。それがわかっているのか、根岸は小百合の言葉に反応しなかった。今日自分が言った「呪いには違いない」というのが、自分の身にも起こった。佐藤に言った言葉が跳ね返ってきて、一体どんな気持ちなのか察することはできない。

そんなもの、知りたくもない。

「嫌な感じだ」

「そう、嫌な流れよ。連鎖するわ。模倣は便乗できて、楽だから」

小百合の意見に頷いた。そう、真似をするのは楽だ。前例があれば、悪い事をしているという自覚が薄れる。「誰かがやったから」。その魔法の言葉は錯覚を起こす。

なぜ、今になってこんなことになったのか。藤田先生のした『余計なこと』とはどんなものだったのか。

「小百合、藤田先生の『余計なこと』っていうのは何？」

「『劣等感と障害は似ていて、誰もが持っている』。『今できることをやれ。今だからできることをやれ』。無責任な言葉よね。なんでも理由にできる」

小百合が吐き捨てるように言ったのに対し、根岸はびくっと大きく肩を震わせ、口を閉じた。思い当たる節があるのか。

劣等感と障害が似ているはずがない。劣等感は勝手に自分が感じるものだ。勝手にキズを作って、痛いと言っているだけだ。障害は、悪いものと言い切れないけど、負担になるものではある。そこに確かなキズがある。

全然違う。

それに加えて「今できることをやれ」。

今できること。高校二年の今できること。高校も二年目になって高校生活に慣れてきた頃で、受験もまだ先だから一番余裕がある時期だ。そして一番不安定でもある。思春期で、人間関係にも悩む年頃だ。そんなときに『今だからできることをやれ』と言われれば、常日頃思っていることが当てはまるのは自然なことで。

根岸の場合、それは『友達だが気に食わないところがある佐藤に悪戯をする』だったということなのか。
僕はその言葉をそのままの意味で受け取っていた。後悔しないように、夢に向かって今できることをやれ。それが、違う結論に辿り着くとは。
「良い意味は、同時に悪い意味も含むことがあるのよ。長所と短所なんて、紙一重、解釈の違いだしね」
「小さな親切大きなお世話、ということですか」
真弓は根岸の肩から手を離し、膝を伸ばして立った。もう根岸を支える必要はなくなっていた。根岸はさっきまでの動揺が嘘のように、体の震えは止まり、下を向いて何かを考えているようだった。
根岸のことは放っておいても大丈夫だ。自業自得だといってしまえばそれまでだけど、もう助けが必要には見えなかった。
「そろそろかもね」
「そうだね」
二人の予測は何を示しているのかわからなかった。真弓もわからなかったようで、首を少し傾げていた。その様子に肩を竦めて同意を表した。
やっぱり勘違いだったのかな。二人にとって僕は特別なんて、なんで思ったんだろう。主語も述語もない、端的に何かを示す言葉が理解できない。でも、友達であることは変わりない。
真弓のいつもの優しい瞳に、少し泣きそうになった。

6　過去を引き摺りだして

「今回の事件は『眼帯』の派生なのよ」
帰り道、小百合は唐突に話し出した。今まで話していた話題とは全く関係ない。でも、何に関係しているかわかった。
気になっていた。あの場で、『劣等感と障害は似ていて、誰もが持っている』についての解説はなかった。
「小さい頃、眼鏡に憧れなかった？　ギプスをしている子が羨ましかったり。不便なはずなのに、特別だと思ったりしなかった？」
「確かに思った。包帯とかも特別に思えて」
魅力的な負のアイテム。付けていると、特別だった。皆の注目を浴びて、心配してもらえる。
あの頃はただのトローチも、特別なものに見えていた。
「二年前にもこの学校で流行ったことがあるらしいの。あるドラマが流行って、人気俳優がアクセサリーのように付けていたから。これを付けるだけで特別な人になれた気がするのよね」
たとえ本当はそうでないにしても。
はい、と渡された眼帯をポケットに入れた。

朝、教室に入ると、昨日のことはもう知れ渡っていた。僕が教室に着くのは一時限目が始まる十分前だから、生徒は大体来ている。佐藤はまだ一昨日のことを引き摺っているのか、姿が見えなかった。根岸も佐藤の轍を踏むのが嫌だったのか、空席になっていた。佐藤の様子を見ていれば、自分がどうなるのか容易に想像できる。
当事者がいない中、話は盛り上がっていた。小百合は話に参加する気はないようで、本を読んでいた。その顔は俯いていたが、不機嫌そうな表情が見て取れた。智哉は小百合の横に立って様子を見ていた。

昨日は散らばった札を回収し、何があったかわからないようにしたはずなのに。誰が噂を広めたんだ。誰かが何処かで見ていたか、犯人が自分で言い出したか。

「真弓、お前また一番に着いたんだってな。お前がやったんじゃないのか？」

また黒井が無責任なことを言った。黒井も小百合同様影響力を持つ存在で、その発言に周りの生徒は反応した。昨日は小百合の方が影響力が強かったため負けたけど、今は違う。真弓に嫌な視線が集まっていた。

第一発見者が犯人なんて、笑えない。学校でそれをするのはメリットよりデメリットの方が大きすぎる。今回事件が起こった場所は、どちらも特定するのに時間が掛からない場所だったんだから、その可能性はもっと低くなる。発見するのは他人の方が適当だった。

その中で真弓は平然として、いつもと変わらない笑みを浮かべていた。打たれ強い。また真弓は被害者で、何かを我慢している。

「真弓がするはずない」

思わず口から出た。言った本人が驚いているのだから、周りも驚くのは当然だった。真弓に向かっていた視線は一気に僕に集まった。黒井はまた邪魔をされたのが気に障ったのか、こっちに向かって歩いてきた。

うわ、威嚇してるよ。でも本当のことだから仕方ないじゃないか。

「何でそんなことが言えるんだ？　真弓は八方美人でいつも他人と線を引いているだろ。もしかしたら、偽善なのかもしれない。佐藤や根岸を嫌っていたかもしれないだろ！」

「『かもしれない』なんて憶測は無意味だ。それに、偽善でもそれは優しさだよ。真弓はそんな卑怯なことはしない。怖いわけ？　犯人がわからないことが」

だから誰かを犯人にしたいのか、と言えば胸倉を掴まれた。

いいね、その短絡的なところが。そんなことをすれば、不利になるのは黒井の方だ。殴られるのは覚悟の内だった。こんなときに凄ま

れても、恐怖なんて感じなかった。周りにいるクラスメイトは理不尽な黒井の行動に戸惑っているようだった。
そのとき、凛とした少し高い声が通り抜けた。
「初めに言い出した人が犯人、っていうのもあるよね」
黒井は声のした方へ顔を向けた。言った本人、智哉は小百合の横に立ったまま無表情で黒井を見た。智哉が教室で普通に話すのは珍しかった。小百合とはよく話しているが、その声は控えめで、はっきりと聞いた者は少ないだろう。
黒井は一瞬怯んだ。それが掴まれたところから伝わった。
「その手を早く離しなよね。そんなことしてると、本当に犯人だと思われるよ」
黒井は乱暴に手を払った。掴まれたところの皺を伸ばすために服を軽く払い、智哉を見た。黒井を責める瞳に出逢い一瞬迷ったが、お礼の意味を込めて薄く笑った。智哉は安心したのか、瞳の強さを少し緩めた。それでも鋭い視線を黒井に向けた。
真弓は自分を庇ったことで矛先が僕に向かったことを心配していたようで、黒井が離れてから急いで駆け寄ってきた。
「大丈夫ですか？」
「平気。小百合、今回も解説を頼める？」
僕が攻撃対象になってからずっとこっちに視線を向けていた小百合は、やれやれと言った様子で立ち上がった。手には昨日拾った札を一枚持っていた。他の札はどれも同じで、処分してある。
「これは『祈祷』を意味するもので、『呪い』の効果はないわ。書いてあるのも間違ってるし。でも、相手の意思は『呪い』。昨日と同じね」
小百合の解説に教室にいる全員が耳を傾けていた。
そう、また『呪い』だ。昨日は魔法陣で、今度は札。種類は違っていても、どちらも第一印象は『呪い』を思わせるものだった。
黒井は何も言わなかった。小百合には弱いのだろうか。それにしても、大人し過ぎるような気がする。これは、なんとなくわかった。

黒井は小百合のことが好きなんだ。智哉に対しても素直に従ったところを見ると、小百合と一緒に行動している智哉も一目置かれているということだろう。突然その中に加わった僕を良く思わないのは仕方のないことだ。僕だって未だに何故一緒にいるのかがわからない。

友達という理由だけで。友達になるのに理由はなくても。

「一つ言っておくと、『呪い』はそれ自体じゃなくて、その『言葉』が問題なんだ。『呪われている』と思うことが、心理負担になる。そのストレスが、『呪い』の効果として体に変調をきたすんだよ」

智哉の説明は、納得させるものがあった。現代では、ストレスがもたらす体への影響はよく知られている。ストレスは頭痛や胃痛を引き起こす。自分が『呪われている』と思えば、体に異変が出ても不思議ではない。でも、ただの悪戯でやるには、相手の負担が大きすぎる。

『それ』に手を出したのは、佐藤とあとは誰なんだ。

「黒井、僕は怖い。悪意が感染しているようで、嫌なんだ。どこに向かっているのがわからなくて、怖い」

「弱虫だな。でも、確かにこの流れは嫌な感じだ。卑怯なのが気にくわない」

僕に向かって嘲るように笑ったが、そのあと苦虫を潰したように舌打ちした。黒井は悪い人間ではない。皆の代表として態度に出しているような感じがした。皆が思っていることを曝け出しているような、そんな明け透けな印象がある。だからこそ、支持される部分があるのだろう。

自分が誰にも影響を与えない、小さな人間に思えた。

「『怖い』と認めるのも勇気よ。由宇はそれができるから好きよ」

突然、小百合がにこっと笑って言った「由宇」と「好き」に、クラスメイトは騒いだ。横目で黒井を見ると、悔しそうにしていた。

何で今言うかな。何か意図があるのはわかるけど。その好きは「友達」に対してなのに、この状況だと特別なものだと思われる可能

性が高い。
「僕も由宇のことは好きだよ。だから、一緒にいるんだ」
智哉も加わった。これは二人の計画だと確信した。何かを煽っている。
それに顕著に反応した教室にいた生徒は沈黙して、僕に不躾な視線を向けた。
嫌だけど、気にしない。二人と友達になるのに、それくらいの覚悟はしていた。
「何をしているんですか。もうチャイムは鳴りましたよ」
担任の声が静けさを割った。女性特有の高い声ではなく、硬い声だった。真弓と同じ丁寧語なのに、使う人によってそれは全く違って聞こえた。
真弓の方が自然だった。
「また呪いのような悪戯があったようです。くれぐれも真似しないでください。では、授業を始めます」
担任が教科書を教卓の上に広げたのを合図に、クラスメイト達は自分の席に戻っていった。教師には従順なクラスだった。反抗する者はこの場にいない。そういうグループは屋上でさぼっている。その方が賢い。教師相手に反抗しても体力の無駄遣いで、そんなことをするくらいなら大元から離れればいいだけのことだ。
それは教師を馬鹿にしていることにもなるけど。
「では、今日は源氏物語に入ります」
硬い声に変化はなく、無機質な感じがして嫌だった。担任クラスの生徒が被害に遭っているのに、それを何事もなかったように振舞っている。悪戯で済ませないほどの悪質なものなのに、他の教師も何も言わないのか。
さっきから一つ引っ掛かっていることがあった。何故、『呪いのような』と言うのか。ただの『悪戯』で充分なのに、特定する意味はどこにあるのか。
授業は自習していたらわかる内容だから、意識を外に飛ばした。

ふと視線を感じて顔を上げると、同じように授業に集中していない小百合と目が合った。苦笑を返すと、小百合は困ったように笑った。
やっぱりこの反応は変だ。智哉の方を見ると、こっちを見ていたようで視線が交わった。小百合同様苦笑をすると、智哉はあからさまに目を逸らした。
これは疑いようもなく、僕の笑顔は二人にとって嫌なものなんだ。これから気をつけよう。変な顔になっているのかもしれない。
隣の席の真弓を見ると、僕の視線に気がついたのか、真弓がこっちを見た。試しに笑顔を作ると、真弓も笑みを返した。これが友達の普通の反応だろう。
小百合と智哉と本当に友達になったと思っているのは、僕だけなのかな。『友達になりたい』と言ったのは向こうだけど、今ではやめたいのかもしれない。名前で呼び合うのも、違う意味があってのことなのかな。恋人のカムフラージュとか。
自問自答に最終的な答えはなかった。

7　過去の部活をもう一度

「約束通り、作ってきたけど」
結局、疑念はそのままで昼を迎えた。昨日と同じ配置で座っている。中華料理ということだけど、装丁は全く気にせず重箱に入れて来た。普通の重箱ではなく、食べた後は一つに纏められるようになっている。料理は食器の見た目も大切だけど、外に持っていくには利便性も必要だ。
三重の重箱を袋から取り出すと、小百合と智哉は早速蓋を開けた。
「わー春巻きが両方ある」
「どっちでもいいって言ったから、どっちも作ってみた」
プラスチックの皿を二枚ずつ渡し、箸はそれぞれ持参で用意は整った。手を合わせての「いただきます」の声は自然と重なり、昨日と同じように昼食は始まった。
中華料理は弟の好物で、和食を得意とする母に代わっていつも作っていた。小学四年のときから週に一回のペースで作っているから、腕は着実に上がっている。実は今日持ってきたのは昨日の夜に作ったものだった。四人家族で、あと三人分を追加しても支障はない。
「うわー美味しい。生春巻きは勿論のことだけど、揚げた方も良いわ」
「炒飯は餡掛けにしたんだね。確かに、お弁当にするとご飯がベタつくからこっちの方がいいけど」
話しながらも口に運んでいく二人に、自然と笑みが零れた。自分が作ったものを喜んで食べてもらえれば本望だ。そのために弟の我が儘で作ってあげていると言っても過言ではない。
二人は僕の顔を見て、動かしていた口と箸を止めた。
これは僕の笑顔のせいだ。
「あーもしかして、僕の笑顔は嫌い？」
「いや、そうじゃないの。笑っている顔が嫌いなんて、そうそう無

いもの。ただね」
小百合は言葉を濁した。笑顔を嫌だということではないことがわかったが、続く言葉が気になる。
もぐもぐと口を動かして沈黙した小百合は困った様子で、智哉に助けを求める視線を送った。智哉は口に残っていたものを飲み込んで、溜息を吐いた。
「君が笑うのは珍しいから、驚いただけ。嫌いじゃないよ、君の笑顔は」
「じゃあ、気にしないことにする」
そう宣言すると、二人は頷いた。嫌われていなかったという事実に安心した。なんとなくなった友達という関係が、今では失い難いものになっていた。一人でいるのは楽だけど、小百合と智哉なら一緒にいるのも悪くない。嫌な視線が付き纏うけど、そんなことは気にならない。
小学時代の給食のように、会話のある昼食は穏やかに進んでいった。

「須賀！　放課後、時間あるか？」
休憩時間に廊下で声を掛けてきたのは、体育教師の武藤先生だった。入学当初から、いろいろとお世話になっていた。
武藤先生は確か陸上部の顧問だったはずだ。
「ありますけど…また助っ人ですか？」
「ああ、頼めるか？」
昨年は部活動の一環で陸上部の練習に付き合ったことがあった。それぞれの得意分野で手伝うため、運動部では球技以外の部活は全て練習に参加したことがある。
「はい。ちょうど体操服も持ってますし。放課後、職員室に行きます」
「助かる」
四十代前半なのに青年の笑みを浮かべた武藤先生は背中を向け、

片手を挙げて運動場に向かって行った。
もう『万屋』は廃部になり、部員ではなくなったけど、頼まれるなら断るつもりはなかった。先輩たちが、先輩たちと作った関係を、壊したりはいない。
それを望まない人がいたとしても。

「今日は陸上部の練習に付き合うことになったから、一緒に帰れないんだけど」
「あ、武藤先生に頼まれたんだ？　うん、了解」
小百合はビシッと敬礼した。こういうノリは『友達』だな、と実感する。猫を被っていない小百合は近寄り難い美人ではなくなっていた。
『特別』な人なんていなくて、『特別』だと決めるのは個人の価値観で。『特別』な人の隣にいる僕は邪魔者で。それは近所から『美形家族』だと言われている両親の子供に生まれたときから始まっていた。弟は両親に似て『美形家族』の一員で。
『普通』な僕は、それでも『特別』な人と一緒にいた。

8　繰り返して戻って進んで

体操服に着替え、武藤先生について運動場に着くと、陸上部員が集まってきた。総勢二十人弱といったところか。三年生の何人かは見覚えがある。短距離選手で、昨年何度か一緒に練習したことがあった。

「今日は須賀に練習に付き合ってもらう。短距離専門だけどな」

「よろしくお願いします」

軽く会釈をした。それに対して一部は嫌そうな顔をし、一年生は不思議そうにしていた。部活は排他的で、一時的な関わりは嫌がられる。昨年は僕の部活動として参加したから、こんなにあからさまじゃなかったけど。

一緒に練習したことのある選手は軽く手を挙げて笑った。

こういう人がいると、たまに練習に付き合うのも良いかな、と思う。

「須賀、まずは百メートル走のタイムを測るぞ」

「わかりました」

武藤先生がゴール地点に向かったのを見て、　スタートラインに立った。

懐かしかった。二年生から体育は選択になっていて、球技しかない。よりによって、苦手な球技。苦手なだけで平均レベルくらいは出来る。目立たない意味では、球技は好都合だけど。

単純なタイムの測り方で、横に立った部長が手を振り下ろすのがスタートの合図だった。

「久しぶりだな。今日はよろしく」

「期待しないでくださいね」

短距離選手の部長は僕の走りを気に入ってくれて、助っ人をするときはよく一緒に走った。そういえば、前の部長も短距離選手だったな。

百メートル先で武藤先生が手を挙げたのを合図に、腰を落として地面に手を着いた。練習は好きなやり方でスタートをしても良いことになっている。

僕の場合は、昔からのあの掛声で。

「よーい」

部長の手が挙げられ。腰を上げて。

「ドン！」

手が振り下ろされた瞬間、足が一歩出た。

風を切って。

前へ、前へ。

ゴールだけを見て。息なんてしなくていいくらいに。ただ、足を動かし、腕を振ればいい。

見えないゴールの線を走り抜け、スピードを緩めて武藤先生に駆け寄った。

「十秒七二。相変わらず良いタイムだ」

「ありがとうございます」

武藤先生が告げたタイムに、集まった部員は騒いだ。初めに嫌な顔をしたグループは顔をしかめて囁き合っている。あれは悪口だな。一年生は純粋に驚いているようだった。

一年生は、昨年の僕を知らない。

「流石、元・万屋部員。今日は思う存分練習に付き合ってもらうからな」

バシッと背中を叩いた部長は爽やかに笑った。その表情に嘘はないように見えた。昨年と同じ、変わらない姿勢で受け入れてくれる。ここにはまだ、居場所があった。

武藤先生の合図で各競技に分かれ、部長に引き連れられて短距離の練習に参加した。久しぶりに競って走った。負けたくないとは思わないけど、時折負けられないと思うことがある。自分が望む自分になるため、望まれる自分になるため、やれるだけのことはやる。そのための努力は惜しまない。

部長も僕に似ていて、毎朝誰よりも早く来て練習している。部長と競って負けたときは、素直に負けを認められた。

「今日はありがとう。須賀はもう万屋じゃないのにな」

帰りは部長と一緒だった。

部活が終わった後、武藤先生と話している間に部員は皆いなくなっていた。ちょうど帰るときに部長が部誌を届けに来て、一緒に帰ることになった。

「いえ、今日は楽しかったです。また誘ってください」

社交辞令ではなく、本心だった。万屋のときは部活の一環だったけど、今は助っ人ではなくただの付き合いで気軽に参加したいと思った。

武藤先生にはお世話になっているし。

「須賀はそういう奴だよな。…そういう奴なのに」

独り言のように呟いた部長の表情は暗かった。今まで見たことのないような沈んだ表情で、声をかけられなかった。

「今日、須賀を見て嫌な顔をした奴が何人かいただろ」

「はい。昨年と同じですね」

「悪かったな。嫌な思いをさせて。練習に付き合ってもらってるのに」

「いえ、気にしてませんから。短距離選手はみんな良い人ばかりでしたし」

僕に敵意を向けていたのは中距離、長距離、砲丸投げなどの選手だった。関わりがないならどうでも良かった。短距離で走っている分には問題ない。部長は沈んだ表情を苦笑に変えた。

改札口が見えてくるところで、部長は鞄からパスケースを取り出した。ケースにはストラップのように数珠が付けられている。

数珠。そういえば、真弓が言っていた。

「数珠、ですか」

「ああ、今流行ってるらしくてな。後輩から渡された」

数珠は高価なものではなく、プラスチックの玩具のようなものだった。流行りで持つなら、このレベルか。
数珠の玉を弄ってカチャカチャ鳴らし、部長はそういえば、と切り出した。
「また変なものが流行っているみたいだな。数珠やらロザリオやら。眼帯や包帯もあるみたいだな」
「眼帯も流行りなんですか？」
「怪我をしないように、だそうだ」
なるほど。おまじないの類いか。御呪い。ここでも『呪い』が関係している。
非日常なアイテムは、魅力的で。
特別だった。
「じゃあ須賀、気をつけて帰れよ」
部長はパスケースを持った手を軽く振った。
それに会釈で返し、改札を抜ける部長を見送った。数珠が揺れているのが見える。
ポケットの中の眼帯を握り締めた。

9　また先輩と会う意味が

日直当番が回ってきた。ただの雑用当番で、朝のゴミ出しから日誌提出で終わる。弟も早く登校する予定があったため、駅まで一緒に行き、まだあまり生徒がいない七時半に学校に着いた。早過ぎたかな。

とにかくゴミを捨てようと、焼却炉に向かうところで。

「お前、調子に乗ってんじゃねぇぞ」

嫌な声が聞こえた。体育館と倉庫の間で、薄暗く人通りはない。カツアゲには絶好な場所から声がした。ここで何度かカツアゲの現場を見ていた。

またか。

「大会に出れないようにしてやろうか？」

「いいねぇ。生意気な後輩には指導を、ってね」

ケタケタ笑う声が混じる。

無視して通り過ぎることもできるけど、この場に居合わせたのも何かの縁だ。

ゴミ袋を片手に、角を曲がった。

「何してるんですか？」

誰かが来ると思っていなかったのか、背中を向けていた二人は異常なほど肩を震わせた。それを隠すかのように、勢いよく振り向いた。

「なんでもいいだろ！」

「お前…須賀か」

険悪な顔は見たことがあるものだった。柔道部の三年生だったような気がする。柔道部にも助っ人に行ったことがあった。柔道は得意分野で、今まで部員に負けたことはなかった。

「お久しぶりです。お変わりないようで」

「厭味かよ。お前には関係ねぇだろ」

ダンッと壁を殴り、凄んだ。そんなことで怯むとでも思っているのだろうか。
昨年あれだけ実力を見せたのに。嘗められたものだ。あなたは僕に勝てなかったのに。
その様子を真新しいジャージを着た一年生が怯えた様子で見ていた。
「もう万屋はないんだ。伊集院さんはいないんだ！」
伊集院さん。懐かしい名前だった。伊集院聖。『万屋』創設者で部長だった人。僕を万屋に勧誘した人でもある。僕が万屋部員になるため、僕は親戚だということにしていた。そのため、聖さんと呼んでいた。
あの人の影響は、今でも根強く残っていた。
万屋は三人の精鋭で形成されていて、創設から僕が入るまで変わらなかった。ずっと、『特別』だった。だからこそ、『普通』である僕は万屋に相応しくない、と言われていた。部長である聖さんに気に入られていることも気に入らなかったようで。
僕もいろいろ活動していたんだけど。都合の悪いことは忘れているのか、忘れたフリをしているのか。
「聖さんは関係ないですよね。後輩の前で僕に負けたいんですか？」
「二対一なんだぞ？」
「負けるはずないじゃないですか。あなたたちなんかに」
挑発に乗って、二人は殴りかかってきた。
それは柔道技ではなく、単純な暴力で。避けるのは簡単だった。普通のパンチの方が動きが大きくなり、避けやすい。空を切った腕を掴んで引っ張った。相手の体勢が崩れたのを利用して、殴りかかってきているもう一人の前に突き出した。上手く巻き込まれて二人は倒れた。
勢いよく向かってきたのか、地面に強く体を打ち付けていた。自業自得。視線を上げると、下級生が走り去る背中が見えた。
それが普通の反応かな。

「相変わらずだな、由宇」
背後から聞こえた声に、瞬時に振り向けなかった。
この声は。
ゆっくり振り返った。
「学人先輩…」
一宮学人。今年の三月に卒業し、四月からは有名な国立、今は独立行政法人の大学に通っている。昨年まで部活の先輩だった人で、万屋の創設者の一人だった。万屋では主に文化部担当で、たまに学力サポートとして、テスト問題を予想したりしていた。
「なんで先輩が…」
「用事があって来たんだが、早く着きすぎてな。先生が来るまで歩き回っていたところで、由宇の声が聞こえた、と」
楽しそうに口の端を上げた。偶然のように聞こえるが、学人先輩なら計算している気がする。信頼しているけど、信用できない人だ。
いつから見ていたのか。
「一宮さん…」
「まだ万屋ブランドが残ってるんだな。…まだ、由宇を苦しめているんだな」
まだ痛みに呻いている二人に冷たく言い放った。二人はこの場に学人先輩が現れたのが信じられないような表情で見上げていた。僕だって、このタイミングで現れたのにビックリしている。
何を言えばいいかわからない。そこに、聞き慣れた足音が近付いて来るのが聞こえた。
「何やってるんだ！　…ってまた須賀か」
語気荒く、武藤先生が学人先輩の後ろから現れた。
「一宮もいたのか」
「ご無沙汰しております。今日は水野先生に用があって来たんです」
「そうか。おい、そこの二人！　見逃してやるから早く部活に戻れ」
武藤先生の一喝に、二人は素早く身を翻して去って行った。
その様子を学人先輩は冷めた目で見ていた。

「一宮。ちょうど昨日、須賀に陸上部の練習に付き合ってもらったんだ。須賀は変わってなかったぞ」
「そうですか。まあ、由宇も万屋部員ですから」
ふっと優しい表情に変えた学人先輩は、前と変わらなかった。みんなの前で作る表情ではない、部活で見せる顔だった。さっきのあの冷たい目は嘘のようで。
前に一度だけ見たことがある、あの目は怖かった。同時に、嬉しかった。
あれは本気で怒っている目だ。それも僕のために。
「一宮が学校に来た理由に、二年前の事件は関係あるのか？」
「あります。二年前、万屋が鎮静化させたあの事件を知るのは先生方と三年生だけです。それが今になって再発したのは」
「誰かがきっかけを作った、か」
また理解できない会話が目の前でされていた。前は小百合と智哉、小百合と真弓で、今は武藤先生と学人先輩。
二年前の事件。小百合が言っていた気がする。昨日ポケットの中に入れたものを取り出した。
「眼帯、ですか？」
手の平に乗せた眼帯を学人先輩は取った。
「由宇、知っているのか？」
「いえ、二年前にドラマの影響で流行ったことだけしか」
あからさまに二人はホッと息を吐いた。知らない方が良いみたいだ。知らなくて良い、が正解かな。
武藤先生は苛々と頭を掻き、学人先輩に真剣な眼差しを向けた。
「一宮、須賀を巻き込んだのか？」
「これは予定外でした。関係ないことまで再発しています。だから、俺が来たんです」
学人先輩は眼帯を握り潰した。プラスチックがパキっと壊れる音がした。
貰い物だけど、先輩の手で壊されて良かったのかもしれない。こ

の学校での眼帯の意味を知る先輩なら。
「なんでみんな認められないんだろうな」
「努力したくないからです。だから、努力して成功している人を見たくないんです。それは努力していない『自分』を否定することになりますから。聖のように、初めから持っていなくてはいけないんです」
聖さんのように。容姿端麗、眉目秀麗、成績優秀などの言葉がピッタリな人で。加えてお金持ち。初めから全てを持っている人なら、認められる。
僕のように努力して手に入れたものは認められない。
「実際、須賀が万屋部員として活躍していたのが気に食わない奴もいたからな」
「はい。だから文化祭で由宇を主役にして優勝したんですけど。それでも認めないんですね」
学人先輩は、二人が逃げた方を見た。
皆に認められようなんて思っていない。この場にいる二人が認めてくれているなら、それで良かった。認めなくていいから。
放っておいてほしかった。
「由宇、ゴミを出しに行かなくていいのか？」
ゴミ袋を持っているのを忘れていた。ずっと持ったまま柔道部員に勝ち、先生と先輩と話していた。それだけ、非日常な状況だった。
汗ばんだ手でゴミ袋を握り直して、お辞儀した。
「まだ日直の仕事が残っていますので、失礼します」
「またな、由宇。俺もそろそろ職員室に行かないと」
「ああ、俺も部活に戻る」
笑顔で別れた。自然な別れ方だった。

10　終幕へと導いていく

「今日は用事があって一緒に帰れないの。ごめんね」
「…ご苦労様」
日誌を提出して戻ってくると、小百合と智哉は不穏な空気を纏っていた。目の前の机には何かのプリントが載っている。両手を腰に当てて深く溜息を吐いた小百合に心底同情した。また担任から雑用を押し付けられたようだった。優等生を演じているから、やらなくていいことまで任せられる。
智哉も同様に、机の上に紙の束を積んでいた。
「手伝おうか？」
「いや、いいよ。これだけが用事じゃないから」
他にも何かあるのか。手伝いを拒む理由は言いたくないようだったので、訊かないことにした。僕だって、昨日自分の都合で一緒に帰れなかった。
前まで一人で帰っていたのに、今はそれが不自然に感じた。数日で大きく変わった環境。それは急激すぎたのかもしれない。
無意識に救いを求めていたのかもしれない。

「すっかり綺麗になったなー」
足は自然と最初の事件が起こった場所へと向かっていた。あの禍々しい赤は跡形もなく消えていた。血は消えにくいから、かなり苦労しただろう。事故現場の処理みたいで、なんとも言えない気持ちになった。
あんなことがあった場所だけど、それでも僕にとっては安心できる場所だった。あの赤は、呪いではない。あれは智哉が言っていた、心理負担のための手段だ。
この場所はまだ僕のものだ。誰もいないことが一層心を落ち着かせた。

いつもと同じように、溜め込んだモノを発散させるように大きく声を出した。合唱部の練習にでも聞こえているのかな。小百合が言っていた言葉が過ぎった。どんな風に聞こえるか試してみたいと思う。

久しぶりに出した声は思ったよりも伸びた。高音が自然と出る。腹筋を鍛えて出した腹式呼吸の声は、無意識の内にアメージング・グレイスを紡いでいた。昨年優勝した文化祭で歌ったものだった。何度も歌った旋律が喉の奥を震わす。

何かを吹っ切るように歌った。

いつもの帰り道。いつもの光景。過ぎていく景色の中に人の姿は少ない。

駅を過ぎるとそこは工場や大きな会社が並んでいて、少し歩いたところに住宅街が広がっていた。駅付近は学校側が栄えていて、有名なデパートやアーケード街がある。人気のない道は、あと五分ほど続く。

建物が並んでいるため、死角は多い。突然人が現れたように見えたのは、角から出てきたからだった。現れたのは、クラスメイトの志水だった。

「何か用？」

「お前さえいなければ、二人は調和していたんだ。なんでお前がの二人と一緒にいるんだ！」

小百合か智哉の信望者か。確かに二人は並んでいるとお似合いだった。それをうっとりと見ている奴がいるのは知っていた。害はないようだったので放っておいたけど、それがこんな形で影響するとは思わなかった。

志水が怒るのもわかる。僕が入れば二人の関係は変になる。それは表面上だけのことだけど、表面しか見ていない信望者には言っても無駄だった。志水は名前順が智哉の前に位置するため、その思いは強いのだろう。

「それは友達になろうって言われたから」
「あの人たちが？　冗談だろう。真に受けたのか？」
鼻で笑われた。二人が僕なんかを相手にしないと思っていることがその蔑んだ目から痛いほどわかった。
僕だってそう思ったことはある。何故、という疑問は常にあった。でも二人と一緒にいると、そんなことは考えなかった。二人は僕を認めている。
「僕は小百合と智哉の言葉を信じる」
「名前で呼ぶな！　お前が呼んでいい名前じゃない！　わからないんだったら、わからせてやるしかないな」
志水は学生服のポケットから折りたたみ式のナイフを取り出した。刃が怪しく光る。
魔法陣事件があったときの帰り道、小百合が言っていたことを思い出した。西洋で魔女識別方法として、火やナイフがあったらしい。火に手を入れて火傷をしたら魔女、ナイフで身体を刺して、刺されば魔女。悪しき者が傷付く識別方法だったらしいけど、そんなもの普通の人がやったら火傷もするしナイフは刺さる。聖火なんて、結局はただの火だ。
その魔女識別方法が、今自分を試すために行われる。
「今しかできないことをやる。僕のアイデンティティーを守るために」
どこかで聞いた言葉だった。向かってくる刃を見て思い出した。それは藤田先生の言った台詞にあったものだ。そう考えている間にも、刃は確実に僕に向かっていた。どこを刺すつもりだろう、とぼんやり考えていると、背後から人影が過ぎった。
長い髪がふっと頬に当たった。
「小百合」
僕の前に立って志水と対峙したのは小百合だった。不思議と一瞬で人物の正体がわかった。
志水は小百合の登場に驚いたようだったけど、勢いのついたナイ

フの動きは止められなかった。刃は小百合に向かう。
小百合は自ら前に進んでいった。後ろからはよくわからなかったけど、刃を鞄で受け止めたようだった。体を少し傾け、翻りながら志水の腕を掴んでナイフを叩き落した。
ナイフが地面に当たって硬質な音がした。
「それはアイデンティティーじゃなくて、エゴよ」
小百合は志水の前に立って、冷たく言い放った。美人が怒ると通常よりも何倍も怖いというのは本当だった。志水は近くでその小百合を見ているため、その怖さは僕よりも大きいだろう。
智哉も僕の背後から現れ、地面に落ちたナイフを拾った。
「正しいことをした君なら、このナイフは刺さらないんだよね？」
智哉はくすくすと楽しそうに笑った。ナイフをくるくると器用に回している。
二人とも、本当に怖いんですけど。
「もう、止めたら。もうどうでも良くなった」
「優しい由宇に免じて、これくらいで許してあげるわ」
「そうだね」
小百合はふっと気を緩めて笑い、智哉は息を吐いた。ナイフを折りたたんで志水に向かって放物線を描いて投げた。志水はそれに反応できずに、ナイフは地面に落ちた。
歩み寄ってくる小百合に、僕は手を伸ばした。小百合は意味がわからないようで、首を傾げた。
あ、何か可愛いかもしれない。
「有難う、小百合。助かった」
感謝に意図するところを理解したのか、小百合は僕の手を取った。女性特有の柔らかい手。それは優しく重なり合った。これなら恋でも芽生えそうだった。でも、それはない。僕の中で小百合は確固として友達の位置にいる。
穏やかな空気が流れる中、智哉は足早に近寄ってきて、手刀で握手を断ち切った。

「…小百合」
「良いじゃない。今回働いたのは私なんだから」
また二人で分かり合っている。智哉のこの行動は、嫉妬からきたものなのは間違いなかった。
やっぱり、二人は付き合っているのかな。それとも、片思いの両思い状態なのか。なんか、微笑ましい。こういうじゃれ合いを見ていると、無意識に表情が緩んでいた。言い合っていた二人は、僕の顔を見て困ったように笑った。
「さて、そろそろ終わりにしましょうか」
小百合は面倒臭そうに首の後ろに手を掛けた。智哉も同意を示して腕を組んで頷いた。
何が始まって、何が終わるのか。二人は知っていた。

11　それは簡単な構図

次の日は土曜だったけど、午前中は模試のため登校していた。佐藤も根岸も来ていた。進学のため、模試を放棄する気はなかったのだろう。全ての教科が終わった今、ホームルームを残すのみだった。でも、それはまだ始まっていない。

小百合がいなかった。

「諏訪さんはどこに？」

「すぐに戻ってきます」

智哉は即答した。担任はそれ以上何も言わず、待つ姿勢を取った。クラスメイトも智哉の答えを素直に受け止めていた。説得力があった。

智哉の言葉通り、小百合は一分もしない内に戻ってきた。堂々と、前のドアからの登場で。

後ろに藤田先生を引き連れていた。

何をやろうとしているんだ。

「諏訪さん…藤田先生はどうしてここに？」

「諏訪に呼ばれたんだ」

状況がわかっていない教師二人は小百合に答えを求めた。小百合はにっこりと笑って藤田先生を担任の横へと導いた後、後ろ手でドアを閉めた。

教室は完全に閉ざされた。

「もう面倒なんで、終わらせたいんです」

「何を終わらせるのですか？」

担任の素朴な疑問は、黒板にチョークが当たる音に消えた。小百合は黙々と黒板に何かを描いている。それはあの魔法陣だった。小百合が黒板に向かっている間に、智哉は小百合の横に立った。静かに教壇へと進む智哉に気付いた生徒はいないようだった。僕も全然気が付かなかった。教師二人は小百合たちが何をしたいのかが理解

できないようで、じっと見ているだけだった。
それが描き終わると、次に智哉が札に書かれていた不思議な文字を書いた。描き終わったのか、チョークを溝に置いて二人は振り返った。
二つを並べると、それは『呪い』の印象しか持たなかった。
「初めは魔法陣。これは『呪術』の一種よ。でも、ここが間違ってる」
カツカツ、と人差し指の第二関節で示した。何が間違っているのかわからない。
大半が理解できていない中、小百合は淡々と説明した。
「わからなくていいの。ただ、呪いは間違うと呪った本人に戻ってくるの。『人を呪わば穴二つ』とはよく言ったものね。まあ、この『呪い』の本質は『言葉』なんだけど」
それは前に智哉が言ったことだ。「呪われている」ということが、何らかの効果として表れる。
呪いが返ってくるということなら、佐藤に対して行った間違った呪術は本人に戻るということになる。確かにその犯人の根岸は札によって呪われた。
何か、話が上手く行き過ぎていないか？　それに、返ってきた呪いの形が違っている。
「根岸は呪いが返ってくることを知らなかったんじゃないのかな」
小百合に集まっていた視線が一斉に僕の方へと向いた。
当然の疑問だ。良く出来ました、とばかりに小百合は笑い、黒板をバンッと叩いて注目を集めた。
「札の犯人が、それを知っていたのよ。それを利用したとも言える。魔法陣を根岸さんが描いたのは、わかる人にはわかったはずよ。教室であんなことを言っていたものね。札も間違っていたんだけど、これはただ嫌な流れを作ろうとしただけだから構わないの。この呪いは、根岸さんに影響すればそれで良かったから」
小百合によって、この一連の事件が解かれていく。佐藤と根岸は

呪いの仕組みがわかり、安心したようだった。この中で、不自然に緊張しているのは犯人だけだ。
「そこで、早く終わらせたかったから、私は種を蒔いたの」
小百合が蒔いた種。あのときの小百合の発言を思い返すと、それははっきりとわかった。あのときに何故言ったのかわからなかったけど、今ならわかる。
「『由宇が好き』。僕のことを庇ったときか」
「正解。そしてそれは上手くいったわ。昨日由宇を襲った犯人が、札の犯人でもある」
小百合は糾弾するように、志水を指差した。皆の視線は志水に集まった。志水は顔を下に向け、微かに震えていた。少し可哀想だったけど、やったことを考えればこれくらいは仕方ない。
「私と智哉の中に由宇が入ったことを良く思わない人がいるのは知っていたわ。だから、良い機会だと思って利用させてもらったの」
だから、誘き寄せるために僕を一人で帰らせたのか。あんなに良いタイミングで現れたところを見れば、ずっと後ろをつけていたのだろう。用意周到だ。でも、二人は僕に嘘は吐いていない。あの紙の束は本当だと不思議と確信できた。どちらかが僕の後をつけて、一人で処理するなんて流石と言うべきか。
最後の犯人を指摘してこれで終わりだと思った。でも、小百合は終幕を宣言していない。
「由宇は万屋の部員だったのよ。私と智哉と一緒にいても不思議じゃないと思うけど。佐藤さん、あなたもそう思ってるわよね？」
佐藤は突然呼ばれて驚いていたが、すぐに頷いた。小百合が理由を無言で促すのに気付いたのか、戸惑いながらもはっきりと口を開いた。
「須賀くん、歌が上手いから。文化祭でもそれで優勝したし。あの最初の事件の場所で歌っているのを聞いたことがあるの」
恥ずかしい。認められているのは嬉しかったけど、それでも恥ずかしさが上回った。あのストレス発散の行動を見られていたなんて。

万屋部員であったことが、小百合と智哉と友達になるのを自然にさせていたなんて。
あのとき、小百合と真弓が僕ならわからないかも、と言った理由がやっとわかった。僕は自分の歌がどう聞こえているか知らない。
優しい声は、一瞬にして切り替わった。何者も寄せ付けない、冷たい声が教室に通る。
「さて、根岸さんと志水くんの仕業だということはわかったわね。じゃあ、何故今になってこんなことをしたのか。何が原因になったのか」
何故今になって。今だから。今だから、やったのか。その言葉は何度か聞いたことがあった。
今できることをやれ。それを根岸と志水は大義名分のように言っていなかったか。
それを初めに言ったのは。
「先生方ですよね。この騒ぎを引き起こしたのは」

12　自己満足で正当化

小百合は疑問形ではなく言い切った。その強い口調に、教師二人は明らかに動揺した。志水と同じく不自然に緊張していたのはこの二人だった。騒ぎを引き起こした張本人だから、あんな反応をしたのか。

藤田先生が余計なことをした。小百合は確かにそう言っていた。そういう意味だったのか。

「何を言っているんだ。俺が何をしたっていうんだ」

「『今だからできることをやれ。自分のアイデンティティーを守れ』。これだけ聞くと、綺麗なものですよね。でも、それは裏を返せば正当化の言い訳です。悪いことをする後押しになる」

藤田先生の語気の強い声を飄々とかわし、小百合は調子を変えずに淡々と述べた。その反論に、藤田先生は口を噤んだ。それは意図して言ったことを肯定することになった。

あの言葉に深い意味はないと思っていた。だから、引っ掛かることがなかった。でも、精神が不安定な人が聞けば、それは呪文のように聞こえた。その効果は根岸と志水の行動で嫌というほどわかった。

それを煽ったのは担任の朝の報告だ。曖昧に情報を流して不安を誘う。邪心のある者はそれに乗っかろうとする。今だからこそわかる。全ては意味ある行動で。

「『劣等感と障害は似ていて、誰もが持っている』。これは二年前の事件を再発させようとしたからですね」

担任は胸に光る十字架のネックレスを握った。

十字架は、数珠と眼帯と包帯と同列扱いにされていたはずで。

「二年前の再発だから、俺が出てくることになったんだ」

いつの間に居たのか、教室の後ろに学人先輩が立っていた。皆が黒板の前にいる小百合と智哉に注目していたため、誰も気付いてい

なかった。
学人先輩の登場に、教室はざわついた。万屋は、今でも特別だった。
担任、水野先生は傷付いた顔をした。
「二年前、眼帯と包帯が流行って、それに便乗するように傷害が目立った頃があったんだ。本当の怪我か、ただのアクセサリーかわからないからな。それは万屋で解決したんだけど」
学人先輩はあの冷たい目をしていた。断罪する目だった。二年前のことを知っているからこそ、再発が許せないようだった。どうなるか結果がわかっているから、その悪質さは一層増す。
でも何故、この教師二人はそんなことをしたんだ。
「何故こんなことをしたんですか？　佐藤と真弓を犠牲にして。二年前にどうなったか知っているのに」
「また同じことを繰り返すのかと思いまして。単純ですね。あなた達は私達教師をいつも馬鹿にしていたのに、こんなものに踊らされる。私はただ十字架を持っていただけで、藤田先生は励ましただけ。私達が犯人だなんて、そんなことが言えるのですか？」
僕の問いに、担任は冷静に答えた。声はいつもより硬かった。生徒が教師を馬鹿にした。それに対しての行動がこれというわけか。頭が痛くなってきた。正当化することに慣れている人ばかりだ。佐藤のことはわからないけど、関係ない真弓を巻き込んで、何を正当化できるのか。
自分が正しいなんて、それは主観じゃ駄目だ。客観的な評価じゃないと、それはただの自己満足だ。
「…それは自己満足だ」
「そうだね。由宇の言うとおり、みんな正当化の自己満足だよ。僕は誰も馬鹿になんてしない。そして、誰も利用しようとは思わない」
ふと漏れた呟きに智哉は同意した。それに救われた。偽善だと思われてもいい。ただ一人でも味方がいればそれで良かった。僕は担任も、藤田先生も馬鹿になんてしていない。客観と主観が同じだな

んて、そんなことばかりじゃない。態度が全て内心を表しているわけじゃないのに。
今回小百合と智哉が利用しようとしたのは、状況だ。人を利用してはいない。その差は大きい。生徒を利用した教師。それで起こったことを利用した小百合と智哉。結局二人はいつかは起こることを早めただけで、それは相手も救っていた。
何が正しいかなんて、明確な答えなんてない。ただ、悪いことだけは嫌でも浮き彫りになる。
もうこの場にいたくなかった。こんな空気の中で、正常な思考が保てるとは思わなかった。段々と混乱していくのが自分でもわかる。人がこんなにも汚いものだとは思いたくなかった。負の感情が悪を呼ぶ。皆が皆そうだと思いそうになる。
自分をも疑いそうになる。
「ただ僕は、藤田先生の言葉を励ましだと思いたい。小百合と智哉の友達でいたい。万屋部員でいたい。自分が傷付いたからって人を傷つけて良いはずがないんだ。…月曜にはちゃんと学校に来ますから、もう帰ってもいいですか？」
口から心の声が漏れた。声は擦れていて感情が籠っていなかった。叫びたい衝動が身体を支配しそうになるけど、ここでそれをしても何も伝わらない。それくらいの予想はつく。脈絡のない言葉が続き、最後は担任に向けて言った。情けない顔をしているだろう。自分では確かめられないけど、担任の無言の頷きがそれを肯定した。
誰も何も言わなかった。真弓が心配そうに見ていて、力無い笑みを返した。
もう、疲れた。それが伝わったようで、夏目は労わるような笑みを浮かべた。
小百合と智哉は無表情で見ていた。
真弓に向けた表情を作ると、小百合は微妙な笑みを浮かべ、智哉は眉を寄せた。
学人先輩は、変わらなかった。変わらないからこそ、安心した。

あの冷たい目じゃなく、部活で見ていた目だった。
教室のドアを閉めるとき、背後から学人先輩の声が聞こえた。
「信頼を裏切る。その結果がわかりましたか？」

13　それは言葉の代わり

涙が出るかな、と思った。でも出たのは溜息だけだった。
人の悪意を目の当たりにするとそれが他人に向かってのものであっても苦しくなる。自分に問題があるのではないかと、自分を責める。
いつもの逃げ場である家の近くの公園は、休日を楽しむ親子で賑わっていた。それに少し救われる。ベンチに座って項垂れていると、地面に影が差した。二つの影が伸びている。
「有難う。小百合、智哉」
「どういたしまして。由宇、大丈夫？」
小百合の声は優しかった。思わず縋りたくなる。でも、それはできなかった。それは本当に逃げることになる。そんなことで二人を必要としたくなかった。
顔を上げると、僕を心配する二対の瞳に出逢った。その瞳にふっと気が抜けた。知らない内に気が張っていたようだ。
「もう大丈夫。君たちがいて良かった」
ちゃんと穏やかな笑みを作れたはずだ。その証拠に小百合は嬉しそうに笑い、智哉は照れたように口元を緩めた。
僕が教室を出てここに来てから数分しか経っていないけど、どうやって終わらせたのか気になった。収拾はついたのだろうか。
それを察したのか、小百合は笑顔のままで言った。
「先生たちは謝ったわ。皆はなんとか気持ちに決着をつけたみたい。すぐに解散したわ。一宮さんもそのまま帰ったの。由宇の言葉が導いた結果よ」
それは買いかぶりだ。僕は逃げた。あの場から逃げても何も変わらないのに、あの場にいるのは耐えられなかった。
もっと感情をぶつけていれば楽になれたのかな、と思ってみても、それは混乱を招く恐れもあった。これは黒井の言う弱さだ。
「由宇は優しいから辛いんだよ。それに比べて僕たちはそこまで優

しくなれないから、ある程度のところで諦めがつくんだ」
智哉の柔らかい声に、思わず手を伸ばしてしまった。それは自覚して引っ込める前に智哉に捕らえられた。手から伝わる優しい温度は。
もう、無理をする必要なんてない。そう、心から思えた。
前に智哉がやったように、小百合は繋いだ手を切り離すつもりはないようだった。
「あの花弁の意味、わかった？」
小百合から何の前振りもなく発せられた問いに、思い当たるものは一つしかなかった。僕を囲むように一面に散りばめられた赤い花弁。あの禍々しさは、今回の出来事を表すのにぴったりだった。
未来を確信していた小百合からのヒントということかな。
「意味があったんだ？」
「まあね。花弁を片付けるの、大変だったでしょ？　出すのは簡単で、消すのは難しい」
「…そうだね。言葉は発してしまうとなかったことにはできない。そして、悪意を消すのは難しい」
思い出したくなかった。あの悪意に満ちた空間。濃密な日々が続いたのが、知らない内にかなりの負担になっていたようだ。赤が目にちらつく。
そういえば、あの花弁の量は異常だった。
「あの花は貰い物だよね？」
「やっぱり貰い物ってわかるわよね。あれは自称ファンクラブ会員から。ちなみに薔薇よ」
「貰い物をばら撒いたんだ…」
小百合はただ笑みを浮かべただけだった。酷いことをする、と思ってみても、気持ちの押し付けに丁寧な対応をする必要性はなかった。最後には花壇に植えられた花の栄養になった花弁。それに込められていたものは何なのか。善意なのか悪意なのか。
悪意を発散させる方法なんてあるのかな。

「そういえば、なんで由宇はよく放課後、教室で寝ているの？」
少しは気になっていたということかな。智哉の疑問は、あのとき言われなくて不安になったものだった。気にしていてくれたということが、今は嬉しかった。
「解放、かな。この自由を縛る学校、教室で寝るという行為は反則だよね。だからこそ、その反則行為で身体の中に溜め込んだ悪意が発散される気がするんだ」
「授業中に寝るなんてことができないから、ね。由宇らしいわ」
そう、授業中に寝ることなんてできるはずがなかった。それを見た教師に悪意が湧くのは当然のことだ。今回の事件の教師を見ていたらそれはわかる。その悪意を受けるくらいなら、眠気を我慢する方が楽だ。それに伴って授業態度は良いと評価されるし。
今回のことは教師二人が起こしたことだけど、最後の事件は二人と友達にさえならなければなかったことだ。あの状況では、小百合も刺される危険があった。
そこまでして僕を引き入れた理由は何か。僕は恋人のカムフラージュではないのかな。
「君たちって付き合ってるんだよね？」
「…何言ってるのさ」
智哉が呆れたように顔を顰めた。かなり的外れな答えだったらしい。じゃあ、今回の事件のリスクに見合うものは何なんだ。
「もしかして、私たちが付き合っているのをカムフラージュするために由宇を引き入れたと思ってたの？」
「そう」
あからさまに失敗した、という顔をした小百合は智哉を見た。智哉は小百合の言いたいことがわかったのか、ただ頷いただけだった。
何が二人の間でわかったのか。
今までの状況だと、それ以外の結論は導けない。
「これも良い機会かもしれないわね。由宇、ちゃんと聞いてね」
小百合が真剣な表情に変えたのを合図に、智哉は繋いでいた手を

離した。今までずっと手を繋いでいたのに気が付かなかった。それほど自然になっていた。温もりがなくなり、手持ち無沙汰になった手を握ったり開いたりして紛らわせた。

「私は由宇が好きなの」

「僕は由宇が好きだよ」

続けてされた告白に、思考が固まった。その台詞は前に聞いたことがあったけど、それとは違うことはわかる。

僕が何かを言わない限り、嫌な沈黙は続く。周りの明るい声が遠くに聞こえた。何を言えばいいのかわからず、とりあえず確かめた。

「それって、恋愛感情ってこと？」

二人は揃って頷いた。偏見ではないけど、智哉が僕を好きというのに戸惑った。小百合が僕のことを好きだというのも、充分に混乱するものだったけど。

「僕と恋人になりたい、そういう好き？」

また二人は揃って頷いた。

友情さえ疑ったのに、それが本当は恋愛感情だったなんて。信じるけど、実感できない。でも、今までの二人の行動に説明がついた。

僕の笑顔に変な反応をしたのは照れ隠しで、今回の事件を利用して僕を仲間に引き入れたのは一緒にいるきっかけを作るため。そんな特別な理由があるなんて、思いもしなかった。裏付けの行動は、その気持ちが本当であること以外は示していない。

でも、今は答えを返せなかった。

「悪いんだけど、今返事はできない。まずは友達から、ということで」

「うん、わかってるわ。だから、友達から始めたのよ」

智哉も頷くのを見て、ほっとした。答えを延ばしただけで、何も変わっていない。でも、新しい何かが始まるような気がした。

まずは友達から。ゆっくりと知っていこう。今は二人が僕のどこを好きになったのかわからないけど、それも追々わかるはずだ。

あの紅に沈んだときから、未来予想図は描かれていた。

「『愛の告白』。初めからしていたんだけどね」
赤い薔薇の花言葉は『愛の告白』。なんだ、二人の気持ちはもう表されていたのか。それも、貰い物の花での告白。鮮やかな赤は禍々しさを感じたが、それ以外にただ純粋に綺麗に見えた。
僕の気の抜けた笑みに、二人は偽らない笑顔を返した。

エピローグ：万屋部員（前書き）

名波咲良は芸能人で、由宇の中学からの親友です。

エピローグ：万屋部員

「二年前の事件、知りたいか？」
学人先輩の問いに対し、首を横に振った。

「由宇らしいというか…でもまあ、『万屋部員』として知っておいた方が良い」
万屋部員として。二年前事件を鎮静化させたのは万屋だと言っていたから、先輩は全て知っているのだろう。
知りたいとは思わない。だけど、知る必要がある。
『呪い事件』解決から一週間後、学人先輩は学校に現れた。
武藤先生の配慮で用意された部屋は昔使っていた部室で、懐かしかった。今は本来の準備室として使用されているため、少し埃っぽい。
昔と同じ席に座った。
「事件のきっかけとなったドラマも、続編が放送されるようだしな。近々前のドラマも再放送されるだろう。また二年前の事件のようなことが起こるかもしれない」
「そうですね。でも、続編の主役は咲良なので」
「聖の従兄弟か。それがどうかしたのか？」
「咲良はみんなに身近な芸能人なんで。もっと簡単に真似できる流行を作りますよ」
流行は作為的にできる。昔のものより、今のものが重要であり、咲良は主役に抜擢されるほど人気がある。
ちょうど前の主役、昔の人気俳優は流行に影響するほどではない。
「由宇は何かアドバイスしたのか？」
「お守りとかどうかなーとは言いましたが。手作りもできますし。まあ、変なものを入れられても嫌なんで、袋型はやめておいた方が良いんじゃない、とも」

「多分それが流行るな。そうか、由宇はもう手を打っていたのか」
眼帯や包帯など、紛らわしいものじゃなく。数珠やロザリオに近いもので。
お守りなら持っていても不自然じゃない。しかも、デザインは自由だ。紙でも布でも何でも良い。
『咲良が持っている』ことで流行するだろう。
「じゃあ二年前の事件は知らなくても良いな。あれは学校全体を巻き込んだものだ。しかも万屋が利用された。最後まで本当の被害者の数は把握できなかったしな。由宇が知りたいと思ったとき、聖が話す必要があると思ったとき、話すことにする」
「わかりました」
学人先輩は安心したように表情を緩めた。本気で心配してくれていたのがわかった。
試作品として咲良に渡したものとは違うデザインのお守りを差し出すと、先輩は一瞬目を見張った後、苦笑して受け取った。

おまけ：由宇の過去

「由宇って、今までいじめられたりしなかったの？」
小百合の素朴な疑問に、隣にいた宙翔が紅茶を噴き出した。
汚い。まあ、確かにこの質問は際どいけど。
「兄さんにイジメ…有り得る」
「何それ。…まあ、あったけど、無駄というか」
宙翔が口を拭いながら深刻な顔をして見てくるのに対し、額を人差し指で押した。
この場にいた智哉、夏目も興味があるようで、無言で話の続きを要求していた。じっと見られると、妙な圧迫感があった。
説明するのは構わないけど、自分が凄い人間だと思われそうで嫌だった。いじめに負けないなんて、美談になりそうで嫌だ。
「まあ、無表情で協調性はないし。それに加え、僕の周りって美形が多いんだよね。で、美形に好かれることが多くて、妬まれたことがあったよ。でも、妬みでイジメをしたら、いじめた本人がその美形に嫌われるから」
保育園から小学校までは、幼馴染みがずっと傍にいた。小学6年間、同じクラスだったから、言葉通りずっと一緒だった。いじめられるタイミングがなかったというか。それに、6年間は意外と長く感じ、僕が幼馴染みと一緒にいるのが普通になり、受け入れられていた。
中学では、1年生の途中から咲良が同じようにずっと一緒にいた。一人でいた期間は、結構短い。
「それに、僕が合気道とかやっているのを知っている人が多いから、直接にはいじめられないしね」
「直接ってことは、間接的には？」
「無視はされたよ」
智哉の問いに、即答した。

直接いじめられないから、いないものとして扱う。それも立派なイジメだった。
休憩時間、皆が友達と話している中、一人でいた。昼食のときも一人。二人組みになるときは、先生と組むことに。
無視は便乗しやすく、別にいじめようと思っていない生徒までもを巻き込んで、僕は孤立した。
そんなイジメだった。
「気にしなかったけど。それに、すぐに咲良たちと友達になったからね」
「そういえば、1年のときは『万屋』のことでいじめられてましたよね」
さすが夏目。よく覚えている。同じクラスだったから、見えたのだろう。
「教科書がなくなったり、体操服が破られていたり」
「うん。で、先輩たちが代わりのものをくれたから」
教科書が無くて悩んでいたら、聖さんが使わないからと教科書をくれた。透先輩も、次無くなったらくれると言っていた。体操服は、万屋への差入の一部だった。
学校では、僕は万屋部員だったけど、聖さんの親戚でもあった。
いじめる人は、聖さんから貰った教科書をどうにかすることもできず、万屋の差入にも手を出せなかった。僕の物だけど、僕のモノじゃない。
「そんなことがあったんだ…」
宙翔は、脱力して凭れかかってきた。
弟に言わなかったのは、言う必要がなかったからだった。両親には、ちゃんと報告していた。教科書や体操服にはお金がかかる。お金のことは心配しなくて良い、と父は言ってくれた。僕が大丈夫なら何も言わないと、母は見守ってくれた。
両親は、家族の中で僕だけが美形じゃないことで、僕が周りからどう言われているかを知っている。それでも過剰に僕を守ろうとし

たり、突き放したりしない良い距離で見守っていてくれた。
一人でも、僕を信じていてくれる人がいる限り、僕は負けたりなんかしない。暴力のいじめには、対抗する力を持っている。
「そんなところです」
一気に話して、お茶を啜った。
こうやって話していると、いろいろあったと実感できた。僕を囲むのは顔の整った人たち。いつも何か事件に巻き込まれていた気がする。まあ、それでもここまでやってこれたからいいか。
「話してくれて有難う」
「由宇らしいね」
「これからもよろしく」
「やっぱり大好き！」
四人の声に、自然と笑みが漏れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1351f/

紅に沈んだ言葉（改）

2011年6月4日20時55分発行